千度云々―漢仙窟に張文成が十娘に契りし時の樂を述べて「千看千意密、一見一憐深」日々に云々―同じく別れし時の歌「日日衣寬十朝行帶緩、顏新一月瘦、身裏帶緩は身瘦せるよ

傾城酒呑童子

作者　近松門左衛門

第一

序詞　千度見れば千々の想きびし、一度見るに一つの面白い事深しとは、張文成が仙女に契りし詞、日々に衣緩び、朝な〳〵に帶緩ふ、悲しみの腸きざ〳〵にたつとは、文成が仙女に別れし恨み、天上下界猶戀慕の園を出ず。況んや心を種として、和歌に稱ぐ日の本の、色香に染める梅櫻、花山の帝と申こそ、雅か成御本性。艶かなる御形、潘安仁が母方の甥にも譬ふべかんめれ。女御後きやう數多さぶらふ其中に、大納言爲光が娘恒子の姫、一朝に選ばれ弘徽殿を御局にて、比翼連理の御語ひ。三千の寵愛只一人、六宮の粉黛も色を失ふ日陰草、其嫉み草身に生ひて、ついに病の床の内、短き夢と消え給ふ。帝不覺の御歎き、朝政したまはず、雲の上何となく忌々しげなりければ、月卿雲客せめてはと、弘徽殿の御姿、繪に寫して奉る。形はありしに似たれ共、物云はず笑はず、中

中思ひの種ぞとて、晝は夜のお殿に御涙を友とし、夜は南殿の月に御心を傷しめ、歎かせ給ふぞ痛はしき。折節帝は萩の戸の、御階にすごゝ下りさせ給ひ、「人やある人や有」と召さるれど、宿直の公卿も程遠く、御應へ申人も無かつし所に、常陸介平安盛、瀧口に候ひしが、「安盛」と勅答して御庭に跪く。帝「近ふく」と間近く召され、「汝は武士の身なれ共、桓武天皇の御葉末、雲井を出て遠からず。物の情は知るべきぞや。弘徽殿に露程も、俤似たる女あらば、尋出して我思ひ晴せよかし」と計にて、又御涙にくれ給ふ。安盛謹んで承り、「さん候。中納言高房が娘三の君は、顔容志操迄、弘徽殿に見かはす計似たる由、御所中の取沙汰、叡聞にも達し參らすべし。此比承れば鳥飼の少將、彼の三の君を戀慕ひ、源の頼光が郎等渡部の綱を媒介に頼み、近々に婚禮取結ぶとは申せ共、普天の下王土に住んで、勅諚と申さんに、誰か違背仕らん。安盛不肖の身なれ共、御文一ッ賜はつて彼の姫に與へ、父母に申聞せなば、今宵の中に伴ひ參り、弘徽殿の御忘れ草、宸襟を安め奉らん」と、忍びやかに奏すれば、主上仰有けるは、「いざとよ三の君が弘徽殿に似たりとは、豫て朕も聞しかど、渡部の綱が媒介にて、鳥飼の少將にまみゆるとな。然れば主有女ぞかし。讓位の後は例しも有、在位の身にて正なき

三千云々―長恨歌にある句にて佳子の寵を專にせる形容
嫉妬―他の女より妬を受ける
南殿―紫宸殿
萩の戸―清涼殿の西東

普天云々―陸地のある限王土なり、普天之下莫非王土（詩經）
いざとよ―いさと上にていやいや

羅生門云々—茨木童子の腕を斬りし話劍の巻にあり

けいぼう—恭望

推品—けだかく立派

朝霜—浸くにかけて浸くして我心を迷はすな

御格子—格子を

事、上一人の善惡は下萬民の龜鑑ぞや。後代の譏りも恥しく、此世の戀さへ叶はぬを、況して冥途の人、戀しき思ひはいか成思ひぞ」と、十善天子の御身にも、世を辛しとの御述懷。戀路の習ひわりなさよ。安盛重ねて「宣旨恐入候へ共、去ながら一夜も夫の家に入、夫婦枕を竝べてこそ、主ある女とは申べけれ。未だ契約計にて、親の家を出ざる女。何條事か候べき。殊に媒介渡部の綱、羅生門の鬼神を切し慎みとて、物忌に籠り、傍輩の對面も仕らぬと承る。然れば祝言の日限も延々と覺候。これ屈竟の折柄、仕課せて參らせん」と勸め申せば、主上も「しるべ嬉しき戀の山、文通ふべき架橋せよ」と、宸筆もこまぐ〳〵と艶書遊ばし、章「此の度の恩賞は望次第」と宣旨ある。安盛烏帽子を地に付、「只今源家繁昌にて、滿仲より頼光まで、鎮守府將軍に任ぜられ、平家はあれ共無きが如し。此御使ひ仕課せなば、頼光が將軍職を某けいぼう仕らん。最早夜も更け候ひなんず。宿所へ歸らず、是より直に參らん」と、御文賜はり表書見れば、上々とても痴話文は、別にかはらず、「冷參る。身分」と計薄墨に、御筆立の堆高さ。御文躰迄さぞ〳〵と、思ひ梨地の御文箱、蒔繪に照し桐菊の、「丸が思ひは深けれど、人は情も朝霜に、置惑はすなと傳へよ」と、常寧殿に入給へば、主殿司の宿直守、御格子參る。三位扨も渡部の綱は、假

下す事

一人武者―四天王以外の武勇者

二月―著るにかく

門屋敷―門の柱の下に敷きたる板木

初の人の詞の爭ひに、羅生門に行向ひ、茨木童子が腕切取、三七日の物忌に、門戸を閉て慎みし、武勇の程こそ由々しけれ。一人武者保昌は、綱が徒然葺んと、舍人馬添只二人、肌に腹巻二月や、空も朧の月毛の駒、門前に手綱搔繰り、「平井の保昌お見廻申る。もの申う」とぞ呼はりける。門を堅めし堤の彌惣、唐居敷を飛んで下り、地に鼻を付て、堤「お出の由申入べく候へども、主人綱事、羅生門にて鬼神の片腕切取、三七日の物忌に籠り候へば、門外にて拙者承り帳に記し、一門他門共に對面仕らず。然るに一昨日渡部の叔母、久しく逢ざる懐しさ、床しい戀しいなんどとて、七十に余る身が樣々歎き恨みしを、變化の業とは思ひも寄らず、恩愛捨難く門を開き對面せしに、忽ち惡鬼と顯はれ、腕を偸んで天井より、あれ御覽候へ。あの如く破風を蹴破り、黑雲に入て失せ候。綱は是を無念に存じ、切腹のお暇申か、一期の浮沈と籠居の節。帳に留置後程申聞すべし。近比無禮千萬」と、慇懃にぞ述にける。保昌破風をきつと見上、ヤ、ウ聞しに違ひなかつしな。去ながら鬼の腕を取返やされそれが無念な口惜い、切腹せふと云樣な、不覺人の渡部に、逢ふて何の用もなし。左樣の男子と知らずして、馬の足費して、見廻に來る保昌迄不覺者と人や見ん。門に立も穢はし」と、駒引返し歸らんとする處に、「待て〳〵保

昌用が有」と、聲をかけて渡部、塀の上に突立上り、「ヤア珍らしい保昌。御邊と某御前にての爭ひ故、其夜羅生門にて鬼神の腕を切たる事、定て音にも聞つらん。三七日の物忌過ば、鬼の腕を御邊が頬へ投付んと思ひしに、口惜や腹立や、化生の業は力なく、やみやみと奪取られ、渡部程の武夫が、鬼神退治の證據を失ひ、表裡者の名を取らん、九泉の恥辱詮方なし。人間業にて此無念、晴さん事かなひ難し。某も腹切て、共に變化の鬼神と成、一度腕を取返し、御分が眼に晒すべきぞ。能い處へ能ふ來たナア。渡部の綱が腹切を能く見置て賴光へ御物語仕れ。今生の對面是限り。生を替て茨木が腕取返し逢ふべきぞ。必々其時に變化と思うて吃驚すな。昔のよしみに取て嚙もとは云まい」と、飽迄に廣言し、既に刀に手をかくれば、保昌大聲上てかゝらくと笑ひ、「やれ腹筋や腹の皮。鬼の腕を切たるが何程の高名ぞ。それを手柄と思ふ故、又奪はれしも恥辱と思ふ。エヽ淺ましや可愛やな。此保昌などは切たを手柄と思はねば、奪はれても恥ならず。變化鬼神を鎭むるは、禰宜山伏行法の出家の加持の數珠先にて、祈伏するも珍しからず。弓矢取身の高名は、鬼より怖い朝敵大敵を亡し、生捕分捕譽れを子孫に殘すこそ手柄とはいふべけれ。是しきに腹を切ふ背を切ふと云樣な、馬鹿侍の切腹を見て居る樣な目は持

九泉―黄泉にて死後迄も也

腹筋―笑の甚だしき時腹筋がよれると云云

ぬ」と、引返して駈出る、太刀の鐺を渡部塀越にしつかと取、「ヤァ左はいはせぬ保昌。左程侮づる渡部を見廻に來たは心へず。笑はん爲か褒ん爲か聞かでは得こそ返すまじ。留まれ」とこそは引たりけれ。呉「ヤァひとり武者保昌が、歸ると云を天津風、雲の通路吹閉て、天地を動かす勢ひにも、とまらば留めて見よや」とて、鯉口鍔に握添へ、鐙踏張り乘すへたり。綱「ヲヽ汝は聞ふる歌人にて、大内にての花盗人。華奢風流の口吟み、辯舌は利いたり共、鬼神を取挫ぐ渡部との力づく、少と慮外」と夕闇の、「羅生門にて、我兜のまつかうこそは引たれ」と、しやくつて引ゲば保昌は、振放さんと捩り引。綱「留まれ止まれ」のうなり聲、呉「かなはじ物」と怒る聲、磯の松風岩打波、兩頭の大蛇が丈山の山の腰、きりょ〳〵と卷締て、頭を竝べ引合ふも、是にはいかで違ふべき。兵庫鎖の白銀作り、筋金ひる金鑢の金、返り栗形裏がはら、中はいか成名作の、干將莫耶御座んめれ。鞘と一つに糾交の、繩になさんと左へ捻ぢ、卷れじ物と右へ捻ぢ、ゑいや〳〵の力聲、太刀の帶取寛ぎて、飾の金具搖ぎ出、からり〳〵からり〳〵と鳴る音は、諸漏已盡の大阿羅漢、神通力を試さんと、須彌山を動かす時、色界に風起り、四王忉利の大伽藍、百億の寶鐸、那由他の羅網、八萬恒沙の瑤珞華蔓、雲井に散て鳴渡り、鑼き渡るも斯くやら

歌人―前に僧正遍照の歌詞をうけてかくいへり
まつかう―鬼が我兜の鍬額を引きし如く我も先づ斯うとゞ引けと也
丈山云々―常山にてその山に雨頭の蛇ありて巧に歌を惱ます事（篠子）
帶取―佩刀之飾也（三才圖會）
諸漏已盡―諸漏已盡無復煩惱一名阿羅漢（金剛經註）

寶鐸―櫨に吊せる大鈴　那由他云々―萬億の寶鈴（上生兜率經）　瑞珞華鬘―寶玉に作れる身の飾と女の首飾　阿吽―口をあきたる仁王と口をとぢたる仁王、阿は開口の音吽は合口の音　ひんぬき―最も秀でたるもの

ん。此世に譬へ物はなし。保昌は古兵、太刀損じては悪かりなんと、するりと拔て帶取を、ふつょと切て切放し、馬乘放しすつくと立ば、綱は鞘を持ながら、塀の上に突立て、睨み合ふたる頬魂、阿吽の二王に異ならず、悽じかりける勢ひなり。龍虎と挑む其中に、段模樣の染被、供の女が頬冠、御所のひんぬき二人が中へ、怖氣もなくしやんと分入る追風や。茨の枝に初花の、一輪咲たる如くなり。兩人怒つて、「ヤァ誰か有。此女引摺退け」と睨付れば、被押除け、女「なんと渡部久しいの」其方は音に聞保昌の。我こそ中納言高房が娘三の君。是渡部、其方は武士か侍か。鬼の腕は切りやらふが侍とは思はれぬ。烏飼の少將殿と目が祝言は、跡の廿八日とは媒介した其方の極め覺えが有ふ。二日も三日も手前から、萬事取持肝煎は、媒介の役ならずや。今日で十日に余れ共、何の便宜吾信なく、父上は腹を立、使を越しても門を閉ぢ、取次者もないと有。コレ世間の娘に問ふて見や。十六七になつてから、嫁入を急ぐか急がぬか。急かぬ娘があつたらば二つ共ない首賭。少將樣も若い殿。駈出る馬を駐める樣にお心も急ふし、我も思ひの溜水、身も涌出る池水に、人目堤の切口は、いかな止めても押へても、思ひ流すに流されず。サァ返答聞かん」と仰ける。渡部も至極に詰り、「御尤千萬なり。去ながら東寺羅生門の變化を討、三七日の物忌に

引籠り、出仕をさへ仕らず。殊に常陸介安盛と源平武勇を闘む時節、不覺の批判受け候へば、源家の油斷と身を愼み、御祝言の御挨拶日限迄も延引。追付首尾なし申べし。聊か如在是なし」と、云も敢ぬに、三ァ、をきゃ〳〵。如在なしとは云はまじ。自らは弘徽殿の女御樣に似たとやらん叡聞にて、未だ祝言せぬ内に、大内へ召されんとて、平の安盛お使只今館へ來る故、我も乳母一人連れ、やう〳〵と逃出たり。今宵の内に嫁入せねば、明日は内裡へ召さるゝ筈。其褒美には賴光の官職を削り安盛を鎭守府の將軍になさるゝ由。我々思ひかなはぬのみか、源氏のひけといふ物よ。斯る大事のありとも知らず、傍輩喧嘩の保昌も保昌。是は如在で有まいか、いや油斷では有まいか。如在ない〳〵と、口で計は小共もいふ。歌さんさ如在は御座らぬぞ。歌にも謠ふ聞きやらぬか」と、恥しめ恨み給ひける。保昌横手を打て、「何んと渡部、姫君のお咄しは正八幡の御託宣、遲なはる處でなし。思案は無いか」と云ければ 編「ヲヽ、思案と云て、姫君を烏飼殿の御館へ、入申ゝより外はなし。御分と我との譯は、根も葉もない内證事。お手前賴む、少將殿へ參つて片時も早く迎ひの輿を賜るべし、と申てくれたら滿足せん」と云ければ、保「ハテ此上萬を内裡へ上ゲ、安盛めに威を付ては我君の御恥辱。何れも我身にかゝつた

如在なし―慢なし

ひけ―よわみ

さんさ云々―歌詞にていかにも如才ないの意

あをり打立―是より以下普通の七行本と文句違へり、式の「第二」の初めも異れり

雑掌―雑事を辨ずる官府の吳職

腹巻―鎧の一種にて胴部七枚あつて袖なし

駕輿丁―駕輿舁

弓矢八幡―誓の意にて問遊なく

まだ〳〵と―ぬく〳〵と

事。然らば我は駈付ん。先姫君を奥へ入、ずゐ分大事にかけ申せ。必人に逢すな。渡部の叔母が又來た共、毛の生へた鬼の腕、姫君には一本もなし、と答へ」と戯ふれて、あをり打立ち走らする。渡部は姫君を奥に請じ、門々を猶ち嚴しく、篝挑灯星の如く、聟君の迎の輿今や〳〵と三重待程に、小夜も漸更にけり。やゝ有て表門忍びやかに音信るゝ。「どなたより」と答ふれば「鳥飼の少將さねかぬが雑掌花垣權の守、保昌殿の御内意によつて三の君の御迎ひ。儀式の車は追而の沙汰、先御乗物取あへず」とこそは云いれけれ。待まふけたる家來共、門を開き入ければ、綱は悦び姫君を聟殿へ渡せば、珍重氣遣なしと兎角しつらひ乗參らせ、乳母は輿に引添ふて、堤ノ彌三主人の代、腹巻打かけ四邊を守護し、迎の諸太夫駕輿丁と共に、乗物引立て飛ぶが如くに急ぎける。五六町も行きつらんと思ふ所へ、保昌大勢引具して一文字に乗歸り、「少將殿の雑掌花垣權の守、輿を持たせて御迎に同道せり。とく〳〵姫君渡されよ」と、勢ひかゝつて云ければ、綱は大きに驚き、「弓矢八幡安盛奴にたばかられ三の君を奪はれし。天が下にて此渡部を出し抜て、片時も生て置べきか。摑み挫いでくれんず」と、踊り出るを保昌捕へて、「こりや物に狂ふか渡部。子細を語れ」と留むれ共、渡「いやまだ〳〵と阿房らしい。咄さるゝ事でなし」

と、飛んで出るを押留る。若黨共口々に、「たつた今少將殿より、良も衣裳も寸分替らぬ花垣殿姫君を迎取、此方よりも堤の彌三付て送られ候處、又只今の御迎旁不審に候」と、いひもあへぬに保昌「はつ」と膽を消し、「ヲヽ、是は渡部せくも道理。疑ひもなく安盛奴が、花垣に能く似たる人をかねて拵へ、深き工と見へたれば、卒爾にては此方が天子に敵對、賴光の御爲ならず。堤の彌三が付からはさまで不覺も取まじきぞ。心を靜めて追かけん。此保昌が加勢ぞ」と、人數の手配り手を合せ、水かう馬の轡を、竝べてこそは三疋打せけれ。堤の彌三忠時は、乘物守護し行空の、春雨連りに風落ちて、雲の脚さへ定めなく、南北に飛び東西へ戻り橋に著けるが　黑雲道を遮つて雷火電光震動し、前後を忘じて立たる所に、迎と見へし者共の、或は一角一眼、又は三目八ッ目の鬼形、枝有角に赤頭、火燄の如く見ゆるもあり　異類異形の鬼神となつて、乘物蹴破り姫君を引出さんとする所を、「南無三寶」と堤の彌三、打物拔いて切拂へども、雲霧に眼も暗み腕弱り、切ても突いても水を切、風を切が如くにて、踏もためす欄干に、呰と云てのりかへれば、召具の者共たまりゐず、左手右手へぞ伏しにける。乳母「是は」と取付を、二つにさつと引裂て姫君を引攫み、惡風吹かけ炎を降し、虛空にどつと笑ふ聲、雲に殘りて失にけり。雷

不覺―不調法
水かう―水を呑ます
戻り橋―一條堀川に在り、戻るにかく
召具―召具する

鳴る騷ぎに綱保昌、あはやと驚き駈付見れば、乳母が死骸乘物も、散々に引搜し、三の君はましまさず。漸く堤を呼び助け、事の樣を尋れ共、變化の所爲か力に及ず。「無念々々」と計にて、言舌正しからざりけり。綱は怒つて齒ぎしみし、「エ、口惜しや保昌、是は羅生門の執心殘つて、我に恨みを爲しょよな。微塵に碎いて捨んず」と、天を睨み大地を踏み、身を揉み猛り廻れども、翼なければ虛空も飛れず。怒れる眼に怒りの涙、嶺の夕日に夕立の、雨を濺ぐが如くなり。斯る處に平の安盛、平家の一族五百餘騎、橋の兩岸追取卷、朝「やア〳〵それ成は渡部の綱、宣旨なるぞ承れ。高房の娘三の君、帝より召るゝ處、遮て是を押へ、剩失ふ段、朝家を輕しめ奉る罪科によつて、搦捕て參らせよとの綸言。違背に於ては首討て梟せとの御事なり。恥を思はゞ腹を切れ」と、弓杖突てぞ呼はりける。綱はにつこと打笑ひ、「やれ〳〵嬉しや。相手欲しう思ひしに平家の大將安盛とや。それこそ綱が口舐ずり。變化より先をのれを」と、跳出れば保昌、「やれ待て渡部。平家にもせよ敵にもせよ、宣旨とあれば勅使なり。上へ對する朝敵と云れては一大事。先穩便に引取て負て勝つ思案もぞ。靜まれ」と制すれ共、綱「いやいや聞ぬ」と駈出る。安盛は勝に乘、「縛れ括れ」と下知をなす。三方論議の眞中へ坂田の

口舐ずり―甘い甘いと口を動かすさま（俚源抄）

はちし―光ちせ

公時、例の大太刀前下りに指ほらし、のつさ〳〵と歩み來る。安盛「はつ」と色違ひ、肩身を萎め軍兵の、中に屈んで隱れけり。公時は橋板も踏拔く計立はだかり、公「只た今迄此處に平の安盛が見へたが、搔消す樣に失たるは、是も變化の所爲成か。變化を切るは綱が得物。又人間のぶう〳〵をひねり殺すは此公時が好物。何處へ失せた」と睨廻し、

ぶう〳〵―ゆすりもの

公「ヤア其處にか。是此處へ御座んせ盛樣。それは譯が惡いぞゑ。怖い事はないはいな。御座んせなあ」と小手招き、鬼の痴話かと氣味惡し。安盛怖々ながら、「左いふは坂田の公時な。我は天子の御使、下郎の傍は穢はし。云ふ事あらばそれから申せ。いはれぬ處へ出しやばつて、側杖に逢ん不便や」と、慄ひ〳〵も口減らず、公時堪らず暴出て、前なる軍兵引掴み、取ては投〳〵、安盛を中に引立引摺出し、攔干にどうと打付ケ　公「やい嘘付め、綱が討手の勅諚とは、何の王樣の勅諚じや。日本の王の仰でないは只た今、賴光禁中で聞れた。大騙のもがり奴。此公時は閻魔王の勅諚にて、をのれらが討手に向ふた。地獄で手間の入ぬ樣に、粉に碎いてやるべし」と、元首押へて胴骨を、「ゑいやうん」と踏付〳〵さいなめば、安「ア、痛や苦しや、許してたも公時。僞りとは云ながら、帝禁恭の御勅き、いさめん爲の忠節。證據は此處に御文も有。去とては過つた。許して

いはれぬ處―用なき處

いさめん―和げ慰む

くれ」と泣きければ、保昌、渡部縋付、「假にも天子の御使、勅書懷中せし者に、足を當ッるは後日の越度。あやまるからは許してやれ」と、漸にもぎ放し、公「サア歸れ」と引立る。命拾ふて安盛は、足早に立退しが、立歸つて大音上、安「宸筆勅書を持たる人には、三公だにも下馬する作法。賴光が郎等共　勅筆の御文を土足にかけて踏だる事、只今直に奏問す。詞をつがふた詩ふな」と云捨て引返す。公時其頤引裂んと飛でかゝるを、綱保昌、「洛中變化の騷動に取混て事喧し。先づ鎭まれ」と制すれ共、公時は「只た今夜食を喰ふた食こなし。變化も鬼神も惡人も、一とこに仕廻ふ」と駈出る。二人「止まれ留まれ」公「いや放せ放せ」二人「留まれ」取々の、雞の八聲や鐘の聲、夜はほの〴〵と酉さす、公時が顏朝日の色に、つれて御所へぞ上りける。

一とこ―一つ

第　二

心の底の悲しさを、涙の外は知る人もなき佛は忘られず。三の君の父母夫婦の御歎き、未だ生死は知れれね共、失なひし日を命日と、廻向追善今日も又、墓參りして歸らるゝ。御供の腰本はした迄、憂に沈む其中に、右近と云は姫君と同年にて、殊更中よく手習糸付

おふし立―育て上る

石を取―子供の戯れ手玉

振分髪―童男童女の髪を左右に振分けて垂れたるもの

世をすて人―世を捨てにかく、捨人は法師、猶子―養子、兄弟之子猶子より出づ

の道迄も、一つにおふし立ければ、其身の歎き父母も、「やれ右近よ、病で死するは世のことはり。火葬は骨、土葬はからだ殘れ共、變化に拂られし三の君、兄弟とてもあらばこそ、何を形見に慰まん。おことも姫も同い年、離遊び石な取、振分髪より中よしで、主從の樣にはなかりしぞや。今日より我々養子にして、姫が二度歸りしと云てなり共樂まん。おことも父上母樣といふてくれよ」と泣給へば、右「いや御歎きは同じ事。髪をおろして姫君樣御菩提を」と計にて、夫婦主從縋り付、聲も惜まず泣給ふ。物の哀の至極なりける、所に常陸の介平の安盛、「公用によつて高房卿御夫婦の内意を得ん」と案内す。萬忌の内にも公用ならば先此方へ」と請ぜらる。安盛頓て對面し、「今度は不慮の御仕合言語を絶し候。それに付　忝　も帝には、弘徽殿の御歎きに又三の君迄失せ給ふ、いやましの御愁嘆。浮世の無常を思召し、十善帝位をふり捨、先月廿二日の夜、貞觀殿の小門より王宮を忍び出、山科の花山寺にて、世をすて人の御有樣。花山の法皇と申奉る。されば共御息女の事猶忘れさせ給はず　右近と申腰本御息女と同年にて、御恰好も似たる由叡聞に達し、三の君と思召御座近く召れたし。貴方猶子として上られよとの院宣なり」と陳ければ、夫婦「あつ」と頭を下げ、「有難や冥加なや。今も今此者を娘が形見我子にせん、と申慰む折柄

何か違背申べき。歎きの中の悦び」と泣々お受申さるゝ。安盛悦び、「早速の御承引我等迄の大慶たり。扨右近に申含むるは、君は今に弘徽殿の事のみにて、外へ御心移らねば、御身をお寢間へ召す事は難かるべし。隨分弘徽殿を惡樣にいひなし、三の君を失ひしも、嫉妬の恨に弘徽殿の死靈のわざ、夢に見ゆる目に見ゆると恐ろしそうに申されよ。時には君も愛想つき、弘徽殿を思ひ切、御身の腹に若宮の御誕生も有時は、其身は則准三后。高房卿も任槐有、此安盛も鎭守府の將軍。第一君の御爲方便の僞りは罪にあらず、と佛さへこもうの御法を說き給ふ。世間忍びの山家の御所ひそかに迎へ申べし。悲しき跡は悅び有。各の末繁昌」と跡先しめて辯舌を、飾る詞の花の山、花山の院へと三重分入し、雲井の月も山曇の、軒端に曇る御住居。松の柴垣竹の簀戸、錦の褥引替へて、苅穗の庵の草筵。主殿司の菖蒲草、蓍ねど軒に生茂り、主水司の初氷、佛の閼伽と碎かれて、曉の鴈夜の聲、何れ哀れの種ならぬ。西の一間は御佛殿、弘徽殿の繪像を掛に　中尊は釋迦牟尼佛。曾「佛も我も十九歳。それは衆生濟度の道、是は戀路の闇に入、猶三界を出やらず。佛は心穢しと、嘸見給はん恥かし」と、懺悔に絞る花衣、昔の袂と朽にける。參り仕ふる者とては、中納言兼左中辨惟成ならで、下部の一人も置れねば、二人水汲みあさ

准三后—大皇大后皇太后皇后の三宮に准ずる祿を賜はる人
任槐—大臣になること
ともう—歳妄
雲井の云々—禁中にもはせし花山帝も位を去りて田舍に引籠り給ふ
主殿司云々—端午の節句に主殿司を勞せずとも自然に菖蒲は橋に茸かると也
主水司—井水氷室などを司る役

佛―釋迦

初々しく―物馴れぬ窮屈

女郎―こしもとおすゑ―下女

瓏の清水―大原にある名水にて其邊に住む大原女

榮摘み、名聞離れし御遁世、戀故とこそ哀れなれ。義兼惟成御前に出、「内々平の安盛申上し高房が召使、右近と申腰本、三の君に似たるよし。則高房猶子となし、御徒然をいさめん爲、安盛今宵御庵室へ密に伴ひ申さん由申越候。若き女の男の中、女の連も候はでは、初々敷も頑にて、却而不興と存れば、京の御所より女孀かおするか一兩人、呼び候はん」と申上れば、平「いやとよ王位を振捨て、内裏を出て世を遁れ、左樣の音信、都の譏り世に煩し。右近とやらんが伴ひには、此山科の里人、土民の妻子、賤の女にても密に語ひ、何方へも漏ぬ樣に」と宣へば、「アヽ誰をがな雇はん」と、二人談合取々の折に、折焚く柴付焉、あの山越へて此山賤が、「八瀬や大原木黑木束木、柴召され」とぞ賣にける。惟成見付て、「なふ義兼、あれは御所へ柴入るゝ瓏の清水のお嫁でないか。何と今宵あの者を賴むまいか」義「是は幸。柴買はん柴買ふ」と呼入れば、山「あい」と答へて内に入、不思議そふに顏を詠め、「是は〳〵見た樣なと思ふたら、京の御所でさい〳〵見た御公家樣達じやはにや。誠に聞ば上樣も内裏をお出なされて、お位は宮樣へ參つたと申が、爰に隱れて御座りますか。何暗からぬ王樣の宮殿樓閣打捨て、私等が住居同然に御内の衆も無さそふな。是は先如何した所謂。お借錢がな有てどあろ。御不自由を推量して、おいとし樣や勿

躰なや。親祖父代々おきよ所へ柴入た冥加の爲、薪は嫁が續けませふ。何程お位高ふても借錢には勝れぬ。本の位倒れじや」と、涙を流すぞ殊勝成。義兼惟成打笑ひ、「いや〳〵左樣の事ではなし。あれに御座なさるゝこそ今迄の帝樣。御髪切らせ給ふ故、花山の法皇と申奉る。其方が心ざし感感なり」と有ければ、「アヽ有難や」と手を合せ、当其えいかんとは私が舅。九十六の錢百で一昨年死なれ、戒名はせいよう永久」と語れば、君も堪兼てどつと笑はせ給ひけり。兩人重て、「今宵君の御慰めに女中一人參らるゝ。御祝言のまなびしたけれ共、我々は男勝手知らず。待上臈も何もかも、萬事其方を賴む」とあれば、当「アヽつがもない。内裏樣の嫁入とは、御所車の御入内一度拜んだばつかり。作法は夢にも知らぬはにや」二人「いや〳〵左樣の儀式でなし。此御住居の事なれば、祝ふてざつと形計。其方達が嫁入と同然に入用の物調へて、御挨拶も申てくれ。平に〳〵」と賴まるれば、当「それならば安い事。八瀨や大原の嫁入は大躰祭同然酒は醪の手作り。高野川の鮎の鮎。干梭魚の挵物。芋と蒟蒻煮〆て、三種の肴が入まする。落付はお雜煮、餅は大方一人前、三升當に搗たれば大概に往渡る。冬なればさつぱりと洗濯夜著も入けれど、暑い時分は是が德。青柴一把燻れば蚊帳釣らずの新枕。閨の中は其身の氣轉。私

もき上所―御座所

九十六の三々―德川時代に九六百文と九十六文を百文に宛てたれば此舅の年も實際九十六なれども百としていふまなび―眞似

醪―濁酒

上置なし―雜物なし

等が若い時分は、祕密口傳も入たれ共山家の奥の奥迄も、今の娘は一人食み。五日歸りする迄は、朝晩のかき鱠　お汁には何なりと尾鰭の付た燒物。尤飯は上置なしの生飯なり」と云ければ、平扨も目馴れず聞馴れぬ、佗たる賤が物語、聞も山家の珍しさ」と、感歎限りなかりけり。はや安祥寺の入相の、音羽の峰に夕づく日、傾く笠の女姿、平の安盛同道にて、御庵室に伺公し、「かねゞ〳〵奏せし中納言高房が養子、右近の前御宮仕へ」と奏すれば、義兼惟成出迎ひ、「能ぞ〳〵。此方へ」と笠を取らせ、引繕ひ玉座に近づけ　安盛も同じく御前に伴はる。安盛憚る處なく、「三の君の身の果余り本意なく、責ての由緣と此女を御宮仕に奉る。叡慮にも叶ひなば、御恩賞には鎭守府の將軍職、偏に願ひ奉る。是右近の前、日比怖や恐ろしやと、怖恐れたる夢物語御咄申上、弘徽殿に負けまじ、と隨分お氣に入給へ。後程御機嫌何はん」と、御前を退出し、旅宿へこそは歸りけれ。右近は稚き時よりも、公家奉公は馴れたれ共、王位に押され身も慄はれ、顏に紅葉の秋津君、共に御心恥かしく、御詞もあらざれば、義兼惟成氣毒がり、「サア此處らが男の困り物。お嫁どふぞ御挨拶、萬事は賴ふだ任せたぞ。我々は花山寺の和尙の方へはづすぞ」と、表へ出れば、当ヲ、それ〳〵跡は私が請取た。先は閨の御盃　酒買ふて來

憑物語―誠の憑にあらずして弘徽殿の愛を殺がん爲女盛の存りごとなり。

ませふ。こんな時には兎角酒、酒は情の露雫」德利提て出にけり。右近は猶も差俯伏き、君も何を打付に云懸給はん詞もなく、茸盆には嘸踊りつらん。踊が好な貞付じや　京と違ふて踊もなき、此山里の淋しさは、住憂からん」と宣へば、右「いゑ〳〵物靜な御住ゐ。お殊勝な佛樣、私は是が好き。此方なは釋迦樣、彼の繪像の佛は何と申ス佛やら、悠氣深いいたづらそふな佛樣じや」と云ければ、法「ヲヽあれこそ丸が涙の種、弘徽殿がおも影よ。位も身をも捨たれど、契は思ひ捨られず。回向をなしてくれよ」とて、御涙にぞ暮給ふ。右近も憐れを催ほせしが、右「ヤ忘れたり安盛の云教へ、此處の事ぞ」と思ひ出し、「ヤア弘徽殿の御影か。なふ怖ろしや凄じや。夢幻に見たとは違ひ、容貌は美く魂は蛇身。見るも怖や」と迷惑ふ。法皇驚き、「こは何事ぞ。子細を申せ」と宣へば、右「さればこそ此間、或時は夢に見へ、又幻に顯はれ、「弘徽殿が怨靈なり。汝君へ召るる筈、妬しし腹立や。三の君を取殺し　あら嬉しやと思ひしに、をのれが枕を竝べんとや。思ひも寄らず叶ふまじ。君に近付女あらば取殺し〳〵、日本國の女の種、枯野となして絶やさん」と、鬼共蛇共譬へなく、追廻さるゝ其苦しさ、身につまされておいとしや。三の君の御最期迄、思へばお主の敵ぞ」と、安盛が教への通、違ひなく〳〵語りける。

お主の敵―弘徽

殿は三の君の敵なりと也

法皇誠と思召、大きに驚き逆鱗あり。「存生にては妬なく、賢女貞女とつくりなし、臨終にも異女に思ひ忘れて慰め、と能も〳〵も儚りし。戀も想ひも覺め果たり。釋迦牟尼佛も聞給へ、三世の契是迄。世々永劫の勘當ぞ」と、繪像を取つて投げ給ひ、「是に付ても三の君が最期の心不便やな。形見には右近の前、閨へ來れ」と打萎れ、入御成こそは是非なけれ。右近繪像を取上、佛壇に掛置て、夸「去とては情なや。お爲に成と有し故、教への通は申せしが、死したる人に無き名を負せ、我詞一ッにて緣を切らせ勅勘有、恨みを許し給へ」とて、涙を流し佗けるが、不思議や繪像動ぎ出、身の毛もぞつと忽ちに、地絹を離れ形を現じ、「右近とやらん慥に聞け、生身の寃罪も辛からずや。科なき骸に勅勘受、寃罪に妹脊の中絶へし、思ひを思ひ知れや」とて、懷に飛入と思へば、「うん」と魂切りて、我ならなくに我心、弘徽殿と入替り、夸「姿は右近の橘の、昔の契りは忘れじもの。彼の驪山宮長生殿のさゝめ言も、君と我中にあらく、あらがねの七重の鎖は切る共緣は切らじ」と手を延し、引ば引るゝ御切髪、亂れ引れてよろ〳〵〳〵、よろぼひ柳氣力なく、風に揉るゝ御有樣。天に引立て地に引据へ、「君が心は飛鳥川、我は三途の波枕、朽る世迄は朽せじ」と、三界六道つき廻る、足弱車くる〳〵〳〵、苦しみ給ふぞ哀成。

右近の橘―紫宸殿前の橘と五月待花橘の香をきけば云々の歌とかねて云へり

驪山宮云々―唐の玄宗楊貴妃と住まれし所

飛鳥川―親疎常なき喩

忽ち―立ちにかく

大原のお嫁は斯共知らず、酒をもとめて歸りしが、法皇右近は亂れ髪、掴み合ひ給ふ躰。髮「こりや何んぞ、はや女夫喧嘩か。今から其樣な身持で、此憂世帶は持れまい。王樣も王樣じや。内裏の格がこゝへは向かぬ。向ひ隣の聞へも有、男は裸百官の、上に立てば女御樣。今で申さばおか樣ぞや。女夫喧嘩所帶の毒。アヽなとましや」と云ければ、法「兎角右近は狂氣ぞや。能く計へ」との仰にて、奥へ入らんとし給へば、右「何處へ〳〵」と玉躰を、引廻し引伏て、「なふ狂氣とは世にある人。我は形も夏草の、蔭に焦るゝ螢火の、聲を立ねばそれぞとも、岩に堰るゝ岩間水、二ツにさつと打割れて、波に碎かば碎けよ」と、さめ〴〵と泣ければ、髮「是おか樣、何んじや割ての碎いての、二ツにも三ツにも鍋釜ぼ、此方の割ても私は構はぬが、世帶の毒とは其處の事。櫂木一本箸片し、只は出來ぬ錢が入る。但彼の王樣の細工に見事遊ばすか。假令それでも勿躰ない、王樣の櫂木は擂らりやせまい」と喚きける。右「いや愚なり。戀路には王位とても隔なし。現世の位は未來の仇、心に思ひ身に忍び、口に戀しと焦るゝも、身口意業の三業の、ナニ三業を知らずや」と、縋付は、髮「なふ悲しや。三ごうとは糠の事か。糠三合持たらば、入聟すなとは男の事」右「是は女の一念の、其玉蔓這纏はりて這懸り、遁れがたなや遁さじ」と、寄ては離

裸百官―百貫にかく

片し―片はし

苦し―繰るにかく　夕闇―いふにかく

りつかう云々―六甲六丁、陰陽道の神の名　天津金木云々―天の鉾屠天の生芧を千座置戸に一ぱい置きて祈るは中臣の祓なり

れ離れては、又引寄する戀慕の綱、「苦し〳〵」と夕闇の、空恐ろしく賤の女も、惱み臥せば玉躰も、疲れ轉ばせ給ひしを、猶も離れぬ恨みの涙、凄じかりける次第なり。義兼惟成此音に、何事やらんと駈付て、抱き起し參らせ、「是は〳〵」と計にて、驚き騷ぐ其處へ、賴光の代官として渡部の綱、阿部の晴明誘引し、一散に駈來り、綱「今夜晴明天文を考へ候へば、讓位の帝死靈の惱す天變有、と奏聞し、攝政兼家公の仰によつて、則晴明召具し候。賴光は禁裏守護に候故、渡部を以て言上」と、細々と述にける。法皇叡感斜ならず、「疾く〳〵加持し申せ」との院宣。晴明右近に近付、りつかうりくていの祕文を唱へ、天津金木天津菅そを、千座の置戸に置足はして、祓ひ申淨め申せば、忽ち慓ひ口走り、「我こそ弘徽殿の亡魂よ。君に恨みは無けれ共、平の安盛將軍職を望ん爲、右近に敎へて寃罪を云懸け、三の君の命も我取たると奏せしは、跡形もなき詐り。三の君は丹波國大江山酒呑童子といふ鬼神の所爲。疑ひ晴て勅勘許し、契りを違へ給ふな。さらば〳〵」といふ聲に、靈化は失せて覺めければ、女御の姿あり〳〵と、もとの繪像に移りけり。右近夢の心地にて、安盛が詞の工言上すれば、死靈の告一言一句違ひなし。「皆安盛が惡逆」と、逆鱗殊に甚しく、平今宵當所に宿する由、搜し出して搦取り、賴光が心に

靈化―ものゝけ

任せ計ふべし」との院宣も終らぬに、平の安盛參上し、安「右近の前は叡慮に叶ひ候か。伺ひの爲參りし」と、いはせも果ず渡部、「院宣成ぞ」と胸板を、かつぱと踏付乘かゝり、繩をかくれば、安「こは如何に。忠節はげむ安盛を搦めよとの院宣は、心得難し」と立上る。綱「いや科はいふに及ず。をのれが心に覺有。云譯あらば賴光の御前にて申べし」と、頬骨を五つ六つ續け打に打付、「それ〳〵」と引立る。猶々玉躰安全の御祈禱を、晴明が千早振てふ祝詞の聲。君は女御追善の御經の聲打交り、さながら神も影向し、佛も來迎有ばかり。佛法王法神道も、共に盛の花の山、今に古跡ぞ殘りける。

晴明—爲よにかく影向—神佛の降臨あゝる事

第三　東寺の西口いばらきがつかむ八百兩のきんさつ

歌「戀と呼ばずと、行かずに置こか。君が見たさの鏡山」ひらぎの長が土藏作、風にも散らず日に枯れぬ、黄金花咲く松と梅、百に餘りて圍はし、二百余人の玉蔓、夕べ〳〵に産出す、てよなし金の攫取、茨木童子と名に高く、母屋は惣領太四郎が、揚屋、女郎屋親子して、鋸商ひ金銀は、鋸屑と溜りける。こゝに加藤兵衞氏綱といふ浪人有、身にも譽持ながら、未時にも粟田口、浮世を忍ぶ柴の戸に、去ぬる彌生やすらゐ花、一人娘

戀と呼ばずと—戀は來いか、次は呼ばいてもの意　ひらぎの長—此の作の主人公にて德川の初め傾城屋華齋を爲し茨木屋華齋を寫したなり　松と梅云々—太

夫と天神が百人餘、百匹桃をかけたり　囲はし—囲女郎と端女郎　タベ—結ふにかくてゝなし—父の知れぬ子と資本いちずの金　鋸箱—揚屋と女郎屋と兩方で儲ける箱　粟田口—逢はずやすちゐ花—今宮社の祭にて三月十日里人烏帽子素襖着て太刀をかたげやすちひ花よと囃して社を廻る（都名所圖會）　五分—藝遊笑覽に囲端女の花一本一匁一分とあれば五分は安女郎の價也

を見失ひ、足手限りに身を碎き、尋廻れど影も見ぬ、鏡の宿にぞ著にける。見馴れぬ里の賑はしさ、行かふ女郎の年恰好、同じ程なを見るに付、若し此里には居ぬ事かと、尋るも面伏せ、聞ねば心落つかず、摺違ひすれ縺れ、一つ處を行戻り、案じ佇み居る處へ、北むきのつまがはが袖を控へて「これ君樣、旅のお人か近付もなさそうな。局へごんせしつぼりと、知る人になりんしよ」氏「ヲヽ、過分〳〵。客にもならふが、先密に尋たい事が有」と、云せも敢ず、っま「尋たい事合點じや私が位かゐ。極つた通り五分でごんす。安いものじや這入らんせ」氏「イヤそんな事ではない。此廓に居る禿子共の親里所は知てかや」っま「ムヽ〳〵私や禿使ふた事はなし。女郎のさもしいそんな事何んの知ろ。まあ這入らんせ」と引留める。氏「いや先重ねて〳〵」と、賣物でない樣な味な所が有ぞゐ。まあ御座んせ」と引留る。武者振付をもぎ放し、鬼一口を遁れし心。目を塞ぎ鼻摘み、ひらぎ屋へこそ入にける。内には見馴れぬ風俗の、胡散らしげな大小に、さすが袖にも待遇はず。亭主太四郎揉手をして、「何方かは見馴れぬお人。我等はひらぎ屋の太四郎と申者。御用は如何」といひければ、氏「拙者は京都浪人者。一生に傾城と物申た事御座らねば、揚屋衆に近付なし。閻魔の廳への訴へに、只た一夜太夫といふ者買ふて

入レ—入ルカ

ひかしやか—ひん〳〵

隠居云々—長の居宅へ見舞にゆく

見たし。路銀の餘り一両二歩、これを貴殿に渡し申。然るべき様に賴入レ」と述ければ、太四郎手を打「さて打明た仰れ様。それが結句野暮の粹。女郎にお望は御座らぬか」氏「いかな〳〵。太夫でさへあれば誰でも構はぬ」太「中女郎と申は、面々に情夫と申戀が有ゆへ、夫への心中、大方初手は振まする。其手管でお目を偸む事も有。左様の時に得手のお方が、今宵一夜はおれが物、一寸側を放さぬと堅くろしいお方が御座ります。そんな事も御了簡なされますか」氏「構はぬ〳〵。振たくば振つしやれ。神樂の鈴程振つしやれ。只氣立の能、ひかしやかせぬ太夫を賴む」太四郎悅び、「こりや女子共、俵屋へ往てせんよ樣呼んで來い。盃持て來い、小座敷の火燵へ火を入れい。先此方へ」と奥座敷。太「私は隱居へちよつと見廻ふて後方、お目にかゝりましよ」と、雪駄も足の横町の、こそ〳〵宿へぞ走行。ひらぎ屋よりと聞嬉しさ。せんよは心たぐり行く。「遣手禿も跡から」と、引舟入ず走込客の事も問はどこそ。せん「これ龜殿、太四郎さんは何處へぞ。私が來る事知てかや」龜「チ、〳〵成程〳〵旦那樣の御合點。障りないお客さん、お座敷は中の間へ、せんよさん御出」と引合せ、位の有松の床柱、とんと靠れて寄添の、無ひ事有事しやら聲に、かみする女子の取廻し、盃計投入の、鼻紙袋にありあはど、露も

位—太夫の位

鼻紙袋云々—加藤は巾著に金多

くあちば花をやりたいと也

打たき風情なり。龜が勝手へ立を見て加藤兵衞居直り、氏先以て今日はお出忝い。我等太夫様方を呼まする風躰な者でなく、身は都に住ながら、女郎達と詞をかはせし事もなし。況て此廓の何方が何方共名も存ぜず。亭主太四郎とやらが心得を以て、不思議にお目にかゝる事、返す〳〵も忝し。一見と申武骨者、なれ〳〵しき事ながら、瞽蛇に怖ずとやら、身に迫ての物語。我等が兄弟より親しき者、當春十五の一人娘、三月より行方知れず、狐狸の所爲かと、夜な〳〵の太鼓鉦。人買人賣の手にも渡りしかと、京都伏見の遊女町、山々谷々探しても、今日迄行方知れず。殊に母もなき者、父の歎き御推量。死したるに極らば、せめてからだ成共と、親は狂氣の如くに成、子が存らへ有ならば、親の悲む一倍と、親子の心思ひやり、我等が身同然に、斯樣に尋申なり。禿子共に思ひ當りの方あらば、お尋も申度、扨こそ氣立の能きお女郎とは望みしぞや。色もなく戀もなく、大事の女郎に立入し御物語、嘸譯知らずと思されん。是も心の遣方なさ。不調法は御免なれ」と、はら〳〵泣て語りける。せんよは鼻紙手に取て、「ナヽ始めてのお客に泣たは、是が始めぞや。少と違ふか違はぬか。女郎の成立は皆それに似たる事。親御の歎き、御念比の中ならば、さこそと思ひやられて、私が昔も今更に袂を絞る計ぞや。

私が昔―私の昔も其通り

此廓の女郎屋、私が親方始めとして、禿共多ィと申て廿人か三十人。肝煎口合有内に、親本慥の判を取、吟味に吟味が廓の作法。此太四郎様の母屋は、ひらぎ屋の長とて隠れもない大忘八。太夫計が五十人、天職が七十余人、圍のはしのと二百人に餘つて、禿共さへ百人余。事の多ひ中なれば、どの筋から何ふこけて、お尋の娘子の御座るまい共申されず。アゝどふぞ知らせて上たや」と、しみ〴〵泣てぞ語りける。表口から急がしげに走つて來る禿の聲。「表星のせんよ様ッは奥にかゑ」と、突と通つて鼻紙の、中から出す延の文。「コレ太四郎様の　お前ゑ進ぜとおしやんす」と、文を渡せば讀隙も、呼ければさゝやいて、頷き合し横顔を、能々見れば尋ぬる我子の横笛。「はつ」と嬉しさ抱付計。「親は爰に」といはんとすれ共人目有。人の思ひ我思ひ、汲かへ〴〵心の水、わくせきするぞ道理なる。せんよが心は戀一筋、側の顔には目も付ず、「ちよつと往て來ませう」と、文引裂いてせくしやの、小褄ほら〴〵立出れば、共に跡をも振返らず、連立急ぐ我子の振、氏「コレ禿衆〳〵、ちよつと爰へ借ませう」禿「あい」と見返り、「ヤア父様かいの」氏「アゝ高い〳〵。可愛の者や」禿「ゆかしう御座る」と計にて、抱付ば引寄て、聲を呑だる濕泣き。親子の様ぞ哀成。加藤兵衛涙を押へ、「春より今日が日迄、尋餘

延―延紙
わくせき―沸く
にかゑ
せくしや―もみくしや

つて最早此世に無いものと、思ひ極し上ながら、若しやと爰へ來りしに、思ひも寄らぬ此躰、何として淺ましい。君傾城に使はるゝ禿とは誰がなしたるぞ。いか成者に欺されしぞ。不便の者の有樣や」と、過し彌生やすらひ花の歸るさ、白髮頭に赤ら顏、浪人らしき親父めが、「ヤア加藤兵衞の娘か。小い時に逢ふたれば、定て其方は覺えまい。扨も〳〵成人。加藤殿へも無沙汰した。長の浪人笑止な。其方を賴光樣の御臺所へ御奉公に出そふ。親の立身身の出世、只た今加藤殿共談合し。お主を爰迄迎ひに來た。ちよつと逢する人有」と、欺すとは夢にも知らず、父樣の合點なら、どふ成共と連立て、船に乘せ駕籠に乘せ、此所ひらぎの長へ連て來ゝ。五十貫とやらに私が一期を賣渡す。「ヤア其筈でない、左樣でない」と、泣ても喚いても聞入ず。長が手に渡りしより間がな隙がな逃て退ふ。走つてくれふ、と心懸る素振を見て慳貪邪見な親方が、「五十貫に買ふて、一萬兩にもする奴じや。其根性をなをさぬか」と、縛つて長押に釣下らるゝ時も有、柱を横に渡して、足に石を括付、木馬とやらに乘せられ、夏の夜は裸にして、植込に括付蚊にせめらるゝ時も有。食を停められ、打敲きは常の事。泉水へ身を投て死な

木馬―拷問の道具

格子―太夫の次天神に同じ（異本洞房語園）
しんべ―加賀で

ふかと思へ共、せめて父様に爰に居ると知らせたく。不繁昌な女郎衆は、私同然責さいなみ、木蔭へ寄ては「兎角命が大事じや。地獄へ落たと思や」と傍輩衆の情にて、一日〳〵暮せしが、抓り撲れ小刀針、身内に明所は御座らぬ」と、語る子よりも聞親の、心に釘針刺す如く、共に歎き沈みしが、氏「エヽ憎い奴原。しやつ人商人、其親父奴が名所は聞なんだか」顔「手形の時見ましたが、北白河の廣文といふ奴じやけな」氏「ムヽ何北白河の廣文とや。名所さへ聞たれば、政道明けき賴光へ訴へ、其廣文め獄門にかけ、其方は廓を安々と取出すは今の事。去ながら、其間にも必〳〵、一夜でも遊女の勤して身を穢せば、重ねて武士の妻とならず。一生の大事ぞ」と語れば、横笛又泣出し、「サアそれが悲しう御座んする。母様の御臨終に、「貞女兩夫に見えずとて、夫一人の外とては、男に手をも取らさぬ物。女の大事は是一つ」と、くれ〴〵の御遺言、胸の守りにかけて居る。去ながら近い内格子へ出す、太夫にするとの用意を聞けば、責に逢ふより悲しうて、死なふと思ひ詰ましたに、今お目にかゝれば心に力賴も有。片時も早ふ取返して下され」氏「ヲヽ氣遣するな今の事。それまでは親の名も、人に語るな洩すな」と、いへ共洩る親子の涙、留めかねて居る處へ、遣手の鍋が藥罐聲、煮かへつたる顔付して、「此方のしん

小き下女をべといふ爰も其意

眠たい目云々―寝たい時に寝る故いふ

研磨―身のつくりみがき

さだつ―内輪もめ

ひし―災難

べは爰等へは見へぬか」と、奥へ通つて、遣「こりや爰にじや。はや今から野良かはくか。我身が爰へおじやつて、もう丈長が伸たとて、一日も太夫様方に付もせず、供は仕やらず、眠たい目は仕やらず、朝晩仕事は研磨き。もう半年も居やれば、アノ氣立な旦那様の手竝を忘りやつたか、又しては遣手がぬるい〳〵と棒の側杖喰そふな。何野良かはいて爰に居る。エヽ因果奴」と撲こかす。糞「おりや遊びにや來ませぬ。太四郎様からせんよ様へ文持て來ました」遣「それ夫れが木馬のもと。若旦那の太四郎様には京から御座つたおゆら様といふ、歴としたお内義様が有ぞや。コレ此眼に見へぬか。せんよ様と若旦那のこそ〳〵ゆへ、おゆら様とのもや〳〵が此耳へは入らぬか。内のさだつが面白か。悪魔奴」とてはは打、「天狗奴」とては突伏せ、下がへに手を入て太股を、捻上げ〳〵捻上れ共聲立ず、痛さを堪ゆる憂涙、疊に落てはら〳〵と、齒齦みしても加藤兵衛、出るにも出られず、云へば云負。武士の娘を下主女に、みす〳〵親の見る前で、さいなまする無念やな。飛かゝつてや突き通さん、眞二つにや切殺さん。と刀に手をばかけたれ共、切て誰爲、遣手には科もなし。腹立つる程我子のひしと、喘立心押沈め、氏「ヲヽ遣手衆憎いは道理〳〵。其方は娘は持ずか」と、聲を涙に疊らせて、見ぬ顔するぞ哀成。

遣「こりや客樣ゝ達の手前も少とは恥しいと思へ。其遣ばなしな根生で、今から殿達にしつぽり〳〵やらるゝか。とつとと失せふ」と引立れは、横「申お客樣ゝ、餘所の娘が折檻に逢居る、不便な事やと苦に持て下んすな。私や痛ふもないぞや」と、笑顔にかゝるはら〳〵涙。追立られてぞ歸りける。門を見送り立つ居つ、跡に焦るゝ親心。兵「サア〳〵有かは知れた。頼光の御前への訴へは、上り下りも日數を取る。今宵一夜も見捨ては親も命が堪らぬ。親方ひらぎの長と、太四郎とは親子とや、珍重〳〵。長が邪見無德心の者成共、鬼でもあらず畜類にもあらず。彼奴も子を持たれば、親子の哀は知るべきぞ。某が大地に手を突き頭を下げ、膝を折てくどくならば、指たる我大小の義理にも逼つて、聞分けぬ事よも有まじ」と、亭主が歸るを松茂を、小庭に佇み居たりける。間夫の後妻打波の、おゆらは夫太四郎が、こづか胸倉摑合、敷居で轉ぶ雪駄は飛ぶ。引摺込で上り口　どうと打付、「これ太四郎殿、せんよ殿とのもや〳〵知拔て居るぞや。今日も今日此方が門を出て行と、せんよ殿を呼に來る。「ヤア合點じや」と、裏の路次からそつと出て、こそ〳〵宿へ仕懸て一から十迄見屆た。此方衆親子の商賣は何ゝぞいの。女郎屋と揚屋と、内の女郎と余所の揚屋と間夫したら、此方衆親子がきよろりと見ては居

無德心―思ひやりのない事

松―待つ

後妻折―後妻の許へ先妻が亂暴に行く事　骨董集にうはなりを淡妬の字にあつ爰もその意

ゆら―心の動搖にかくこゞか―小腦か

粹は悠氣―一本下に「は」字あり

三つがなは―一人を證にて取り三人で定むる（俚言集覽）

けんほくほ―不詳

まひがの。先其如く　余所の大事の立物の太夫と、揚屋の身で間夫狂ひ、廓にばつと沙汰あれば、第一商賣の妨げ。女房が倥侗じやとゆらが鼻毛がよまるゝわいの。今計云ふじやない。何んぞ云へば、氣の通らぬ悠氣かと一口に云込め、何んと粹は悠氣せぬ物との何處からの法度ぞ。何方からの極めぞ。サア云やゝ〳〵」と武者振付ば、取て突退け、胴骨を踏付け〳〵　太「おのれが何處へ女房呼はり。其腹持ても女房か。七月の京土產、既に此太四郎に男の一分を捨させうと能ふしたな。女房でない、出で失せふ。去狀が望なら千枚でも書て遣ろ。男共女共、引摺出せ」と犇めけば、家内騷ぎ立、「先親旦那呼で來い。座敷へ聞ゆる。門に人がたかります。アゝうとましや」と騷ぎける。ゆらけら〳〵と打笑ひ、一ハア改つた事計。此お腹が今見へたか。私も京に譯有て、此處へは下るまいと云切て居たれ共、此方の親御が、「懷妊大事ない。其子は太四郎が子にしておれが孫に極る。茶屋揚屋の嫁に其處らは構はぬ」「是非におゐてもらはふ」。父樣との堅めで嫁入て來た私なれば、此腹の子は此方の子。親旦那と三つがなはで、けんほくほはれで產で見しよ。人の浮名立ふより、此方の浮名たしなましやれ」太「イヤ此奴嘘付奴。女房早はゆくまいし、おのれ計が女か。此澤山な女子に、身持な合點じや嫁にとらふといふ、阿

女房草鞋―女房に不足はせまい

こしらへ云々―身の支度も懷姙も

房な親が何處にあろ。大恥かゝぬ中出て失ふ。さなくば取て引摺出す」と小腕取て引立る。門口より親長は、「黙れ〳〵喧しい。太四郎黙れゆらも黙れ。こりや、せんよに勤めをさするによつて、間夫の何のと喧しい。とんと受出して本妻にせい。町の分限者共の爲る程の事、此長が仕兼ふか。疾に内證聞て置た。八百兩では今ても埒の明樣に、俵屋と談合締て置た。コリヤゆら、われが親と云交した詞一言も違へぬ。京の東では住吉屋のゆらといふては名を取た娘じや。ァヽ何ふぞ此方の格子へ出したれば、大儲する物じや、と見込で親へ囁ひかけたれば、「女郎には賣ませぬ。殊に大臣の子を懷妊して居る」といふて埒が明ぬ。其處で此長が愚案を以、こしらへにも懷妊にも構はぬと一杯喰せ、先嫁に囁ふて、跡では其腹な子を疵にして勤させう、と此長が胸一ッで斯ふからくんだ。左樣なふて六貫匁といふ禮銀を、何ゝの値に出そふぞやい。此樣な手練をせねば分限者にはならられぬ。これが己が商賣じや。其腹な子を墮せ。今宵から此方へ來い」といへば、ゆらは返事なく、只伏沈み泣居たる。太四郎聞兼ね進出「せんよを受出し下さるゝ、御恩は海山有難し。ゆらめに勤させふとは、それで此太四郎が若い者の一分、何と立ふと思召。歴々のお付合、京都迄も聞えたひらぎ屋長は、嫁に勤をさするは、むす子の太四郎

流を立―女房を遊女にする

もれそれ―挨拶

じゆんぎ―仁義か

は女房に流を立さす、と悪名を立られふより、同じ恥をかく手間で、孕女を擔いた方が遙かに勝。ゆらめに平產いたさせ、私の子といたし、お前の詞も立ませふ。其上で何となふ親へ戻して下され」と、云せも敢ず、長「ヤア氣の弱ひ。彼奴を親へ戻して、せんよを受出す八百兩は何處から出る。惣じて慘ひ目を見まいと物の哀を知たり、人のおれそれ、世の中の義理じゆんぎを知るが最期、貧乏神が乘移る。此春泡へた廣文が口入のしんべめも、明暮吠え廻れ共、擲き込責め伏て、五十貫をやがて五千兩にして見せふ。コリヤ此ゆらも前出した六貫匁、せんよ受出す八百兩、五双倍にせにや置ぬ。男共ゆらを此方へ連て來い」と、起んとすれば、太四郎留めて「今暫く。申親父樣、ゆら一人が無ければとて、お前が貧乏なさるよか。假令彼れゆへ金銀の山を築けばとて、太四郎樣の内義といはせた者に道中させ、私は生て得居ませぬ。子を產して、波風立ず去に何んの手はつかぬ。明日より此太四郎に人交りもするなとか。御了簡賴奉る一と、手を合佗ければ、ゆらも「只御恩には、京へ往なして下され」と、泣より外の事ぞなき。我子の恥と聞入て、長「そんなら如何成と、墮胎成と、產せ成と、埒明て京へ往なせ。今宵の中に俵屋と通屈して、せんよを明日から呼取、此八百兩の戻る程、餘の女郎共をせつちや

通屈―談判

せつちやう—貫打にてこき仕ふ事

うせい」と、酒呑童子も其處除けの、茨木童子が摑頬、片腕切たき計ない。加藤兵衛聞けば聞程力落、「ム、あの心では泣てもくどいても、聞入はよも有まじ。なまなか云出し仕損じて後日も如何。兎角賴光へ訴へ、御威光でなくんば」と、思ひ定て座敷を立、兵「これ御亭主 勝手も殊の外取込と見受たり。我等も今日もり山迄參る用事ゆへ、お暇申」と笠押取、一重てお出」といふ聲も、聞捨てこそ出にけれ。長跡を見送つて、「あの樣な奴客にすな。何ゝの二ツや三ツ宿したとて塵埃。小喧しい置たが能い。アヽもう往なふ、コリヤ何奴ぞ來い。猿奴、先ハ往てぜんざい餅云付よ。小豆は舌に障る。京の龜屋が羊羹を糟潰してせいと云ハ。太四郎も來い」と立出る。今の榮華は喜見城。女郎の爲には怖ろしき、鬼が城へと 三皿 歸りけり。東宮兼仁親王七歳にて御位に卽せ給ひ、攝政兼家朝政を紀し、武將源の賴光非常を戒め給ひしかば、聖主の御代の九重や、民の訴訟なかりしが、永延二年の比よりも訴訟沙汰人日々に增し、賴光の門前は夜の内より群集して、御門の明をぞ待居たる。夜も明ゆけば賴光、決斷所に出給ひ、末武定光、執筆の役。檢非違使左右に著座して、庭に隨兵兵具を携へ、御門開けば訴訟人、我先にと込入しを、定光進んで「ヤア騷がしく。御批判は後程名をさ

龜屋—三條上りに當時龜屋和泉とて有名な菓子屋あり

末武定光—四天王の隨一ト部季武雅氷眞光

して召出さん。先面々が訴訟のしなを帳に付ケ。それ鎭めよ』『承る』と隨兵かなぶち振廻せば、しいと鎭り突這て、皆々帳にぞ付けける。甲「恐れながら私は、上京西陣織殿屋の孫三郎と申者、十七に成年季の織人、一昨日の暮方より行方知れず失せ候。親請人に尋れば、却て此方を恨み口。御威光を以て御穿鑿仰ぎ願ひ奉る。故郷は錦の小路の者」と、口上の趣を定光帳にぞ留にける。乙「我等は二條室町糸商ひの吉次と申者にて候。一人の悴に一門中より嫁を取、里歸りの道にて見失ひしと申て、今に戻さず候へば、御詮義願ひ奉る。我等が爲には姉が小路の針や、從弟同士」と繰返せば、同じく帳にぞ留てける。次に年比六十余りの女房は、「柳の馬場のあこうと申綿摘敎へる寺子取。十二と三に成弟子が二日に二人の行方知れず。御慈悲に御詮義給はれかし。人の小娘失ひて、未來のつみ綿、親々の恨みはさながら眞綿にて、首締らるゝ思ひ成」と、涙を流して訴へける。丙「私は宇治の里、梅田と申茶師にて候。十八歳の娘閨の内にて姿なし。側に臥したる下女に問へば、こちや知らぬと申なり。細に御詮義下さるべし」とぞ願ひける。「私は今熊の貞月と申比丘尼のお寮。廿三四の弟子二人、勸進に出今日七日、今に歸らぬ御訴訟。則其比丘尼の名、一人は貞林、一人は貞觀〳〵」とぞ申ける。戊「是は深草土器

かなぶち―鎭棒

姉が小路―姉にかく

つみ綿―罪

こちや、細か―皆茶の緣

お寮―比丘尼の師(俚言集覽)

觀々―例の比丘

尼の唄につゝ拍子「ちとくわん」にかゝ

弘徽殿云々―幽靈の告げ前に出ヅ

勾欄―欄干の折れ曲れるもの

師。明て十四の小娘、何者の仕業にや、首も腕も引抜て、腰より下は殘れ共、骨は碎けて候」と、泣こがれて申も有、音羽山の燒物師、女房が天窓の鉢打破れしといふも有。油の小路の傘屋が女房、武者の小路の具足屋の母、お宝の糀屋、吉田には八百萬屋、御幸町のちご醫者、六條の豆腐屋、七條の袈裟屋、おほかめ谷の衣屋、櫛笥通の紙漉、押小路の鮨屋、三條の取上婆、娘を失ひ妻を奪はれ、叔母は姪を尋れば、妹は姉を見失ふ。兎にも角にも御詮義あり、妻の行衛を知らせて給べ、娘に逢せて給はれなふ。御慈悲なるは、と聲々に、泣悲む有樣は、閻魔の廳に罪人の、罪を悔むも斯やらん。目も當られぬ次第なり。賴光も落涙有、「此比の訴訟人、爭論出入の事はなく、妻子を失ふ訴へ、春より帳面八百人に及べり。ヤア汝等、是は丹孤大江山酒呑童子が所爲成由、弘徽殿の告によつて其討手を蒙れ共、幼主御卽位、大内守護にて延引せり。近々に大江山に分人、生たる者は連れ歸らん。死したる者は敵を取て得さすべきぞ。目に見へぬ變化成共、源氏の威光弓箭の德、滅さで有べきか。靜謐の御代となし、追付歎をとゞむべし。罷立」と仰ければ、「ア、有難や」と一同に、わつと叫びし其聲は、大路に響き哀なり。爰に四十ばかりの男了、勾欄の下に突と出、「某は粟田口の貧者、加藤兵衞と申者。横笛と申

十五才の我娘、當春加茂のやすらひ花に參り、それより今に行方知れず、度々訴訟申せ共、變化の業とて追歸さる。是御吟味の暗き處、變化異形を幸に、人商人の蔓り候。此御心付ざるは御政道の失ならずや。御穿鑿下さるべし」と、憚りなく訴ふれば、末武聲をあらゝけ、「御政道暗しとは天晴おのれは嗚呼の者。して汝が娘人壹に取られし證據や有」と睨付る。加藤兵衛ちつ共臆せず、一さん候。江劫鏡山ひらぎの長が許にて、娘を見付候ゆへ詮義を遂候得ば、北白河の廣文と申者より、料足五十貫文に買取と聞より早く、廣文が宿所を尋候に、此比他國仕る由。去によつて恐れながら御威光をかり奉り、「武將よりの御召成ぞ。廣文が妻子召連れ來るべし」と所の庄屋に申渡候へば、追付引連參るべし。對決願ひ奉る」と憚りなく言上す。賴光聞給ひ、「神妙々々。汝が詞上を蔑するに似たれ共、却て政道を勵す一助。我何んぞ下聞を恥ん」との給ふ所へ、北白河の土民共、「廣文が妻子召連れ參りし」と、四十餘りの女房、十四五計の娘の子庭上に畏。賴光御覽じ、「廣文が妻子は已等よな。夫の廣文粟田口の加藤兵衛が娘を勾引し、鏡山の遊女に賣たる條紛なし。定て汝も能く知つつらん。夫が宿所に居らぬ由、欠落か。但行先知たるか、眞直に白狀せよ。少も陳ぜば拷問させうずるは」との給へば、女房は聊かわろび

料足―錢
陳ぜば―偽り申さば

れず、「夫の悪事を女の身にて存ぜねばとて、同罪遁るべき樣なく候へば、陳じても益なき事。左樣の事は夢にも存ぜず。如何樣過し春の比、古傍輩の合力とて、浪人の營を助りし事も候へば、若し其子を賣たる値にてや有つらん。それも詳しく存ぜず。又欠落かとのお尋。假令首を討るゝとて、逃隱るゝ樣な夫にては候はず。去ながら一夜にかはる人心。夫婦の中とは申ながら、計ひがたし」とぞ申ける。頼「ヲヽ、健氣成申樣。天子大嘗會の前なれは、死罪を宥め助け置。北白河の庄屋年寄、廣文を尋出し、娘を急度渡させよ。加藤兵衛も鏡山へ同道して受取れ。違背せば連來れ。庄屋其旨承れ」と、御座を立たんと仕給へば、親も庄屋も詞を揃へ「其間妻子共逃去も氣遣はし。迚の殊に廣文出る迄此女、牢舍仰付られかし」とぞ願ひける。頼光打笑み給ひ、「ヲヽ、逃るといふ共唐土天竺へはよも行まじ。津輕合浦、筑紫の果、王土の限りは武將の下知。僅に圍ふ牢舍計牢舍とはいふべからず。頼光が許すといふ詞を出さぬ其内は、千里が野邊も牢舍たり。逃ば逃せ。頼光が一言は千筋の繩ぞ。罷立て」と簾中に入給ふ。文武の德のとう〳〵と、威有て猛からず、實に名將の源の、水上淸き印には、世々に流れて家々の、平橘藤原や、八百八十氏は多けれど、めぐり〳〵て盡しなく、猶源の御代に住む、民に幸有

嘗―くちし向き

大嘗會―御即位の後初めて行はせらるゝ新嘗祭

逃去、殊―原本のまゝ

平橘藤―源平藤橘を四姓と云、其内橘は尤も少きも嵯峨の御世

に皇后の御ゆかりを尋ねて入れたり（兼通傳）

月も日も―庭の廣き事「武藏野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそ入れ」の歌による

光林―有名なる靈家尾形光琳

恥し―羽束師森

みやのぎ―宮城野か

しやく―笏と癇とかけて長の癇癇は持病なりと落したり、此句小出雲等を驚かしたち有名の句

熊野―湯屋にかく

たけ〳〵―竹や火を焚け

算用云々―蠶よりも養ひ料の多い事

破落漢―鳴らずにかく

とかや。

第四五　植籠の大江山、榮華は大格子の唐織

月も日も、庭より出て庭に入、廓の内の武藏野や、ひらぎの長が廣庭の、光林風の筑山を、見渡す目さへ遙々と、谷の岩組九十九折、筑波の山も恥しの、森と繁りし植込は、華麗を盡す物數寄の松の作木作枝、庭の松風三味線の、天柱に通ふ細廊下、數寄屋が軒の南天に、珊瑚珠繋ぐ玉簾、萩はみやのぎ躑躅が岡、梅や櫻の花紅葉、天より四季の仕著せして、手の外の色ずくめ、金ずくめなる身の榮華、金の冠を著ぬ計、しやくは持病に行とかや。豫て催ほす檜木舞臺も成就し、今日こそ爰に晴の能。三番過て中入の、熊野より直にお行水、臺所にはどや〳〵と、五色の赤飯蒸立る、鍋釜有たけ、たけ〳〵と女子呼つぐ男共、見物場掃く水を打、樂屋に續く衣裳場に、お出入の藪醫針立、算用足らずの懸倒れ、傳授覺えて手は利ぬ、古皷のならずもの。其他萬能一心の家業なし。「扨も出來た遊ばす〳〵、米取る能太夫も跳足じや」と、慶庵とりぐ御機嫌伺ふ折節、湯殿の内より、「お上りい」と呼はれば、「ア、イ」と答へて禿共、緞子縮緬天鵞絨裏の、

萬能一心—蕊は有ても不正の人のみなり
米取—知行取つてゐる能役者も長には叶はぬと也
富士の煙云々—富士の根の煙も猶ぞ立昇る上なきものは思ひなりけり（新古今集）
京の水—京は水良ければ饗宴に取寄せたり
本膳—本膳にかく
春正—名高き山本春正の作
したゝめ—食事せよ

臘虎の蒲團の三つ重、沉の脇足煙草盆、湯殿を出るひらぎの長、天窓の鉢に立湯氣は、富士の煙の上もなき、ほとび過たる湯上の、お伽共がお髭の塵。伽「扨も熊野の面白さ。何うも〳〵。能い衆のお客達が先彼の衣裳の結構さ、大名もかなわぬとの御評判。お行水なされて追付松風、皆待兼て御座ります」長「イヤ行水心が悪い。水計に五人三人かかつて居て、京の水をきらして、かゝり湯にあふ坂の水を使せおつて、扨肌の鹽梅の悪さ。金次第でならぬ事はなけれ共、汲立の京の水と、嵯峨松茸のとりゞ〳〵、此二色が心に叶はぬ。アヽ松茸時分に上りたいが道中が大義な。舟嫌なり馬嫌ひ、駕籠はふらつく。ヤア福庵、お主は地躰京生れ。若し貧乏公家に近付が有ならば、御所車一輛買ふてくれ。乘て歩こ」と法圖もなき、月蓋長者の隱居せられし如くなり。見に來る人の空燻は、匂ひ渡りし橋がかり。二三の松を煙來て、樂屋にちゝつたんほゝの調も伽羅に埋れて、皷の音さへ蠶來る。長「あれ皷を調べるは、もう次を始めるか、己が案内する迄始るなと云ふて來い。此間何れも勝手へ立てしたゝめ〳〵。我も飯喰ふ膳を出せ」玄「そりやこそ御膳」と呼小烏、古金蘭の膳覆、誠しからぬ取沙汰も、嘘で御座らぬ本膳は、春正蒔繪の價千金、かけ盤高つき、二汁七菜手を盡す。餘所の振廻ひらぎ屋の、朝夕とこ

朝夕—長にかく

杉折—杉材で作れる折詰脚以下は其形を云　三五の義理—五三の桐にかく　播磨潟—張る　鹿様—飾屏　髭籠—竹籠の先を態と編み殘したもの　祇園坊、靱、今橋—皆客の所の名とかけたり

そ据にけれ。七度搗に七度篩ひ、誰が水晶を飯にして、精いとはぬ白鷺の、せゝり箸して不機嫌顔。長「何んと世界にもう食ふ物は無いかい。明ても暮ても鯛の鯉のと喰れぬ物ばつかり。此の二の汁の鳥は何じや問ふて來い」玄「イヤ問ふに及びませぬ。何がな珍らしい物をとて、生鶴のお汁」といふより、くはつと色を損じ、長「鶴といへば結構な物かと思ふて。今時分の鶴、脂が無ふて食はるゝ物か。打明て犬に喰せ。今持て來た平皿は何じや」玄「アヽ是は生鮭で御座りんす。態々若狭へ飛脚を立、取寄たと申されます」長「ムヽ若狭へ取に遣た。こりや出來した」と機嫌を直す食好み。朝暮珍物高直の魚鳥は直に小判嚙む、齒骨も茨木童子なり。思ひ〳〵の大臣の、妓の威勢を劣らじと、能の祝義の贈り物。花とはいへど木々に咲、花の時節は杉折の、雲脚蝶形洲崎形。五ツ重ねの島桐の、紋を透しに手を込て、奥州が名を忍ぶ容、三五に義理を播磨潟「鹿様より」とほのめかす。花紫が深い容、長堀の粹樣、金糸の網をすきかけて、髭籠に籠し祇園坊。半ぶ御贔屓弓も引方靱のお客といふも有。銀の毛彫の飾壺、宇治の花香を其儘に、詰し昔も今橋と、逢夜が客の名に渡る。瑠璃白玉の玻璃罎に、ちんだ泡盛、藥と汲むや玉の井が、お客よりぞと我一に、しづか卷絹金太夫、長門薄雲初紫、色品盡す進上に、よい客持て

ちんだ―南蠻の酒の名

全盛と、先親方の機嫌とる、ひどさぞ思ひやられたる。長大きに笑を含み、「ムヽ是は太夫達のお客方より今日の花か。扨々念比な過分々々。是といふも和女衆が精出し、客に廻つて親方大事に勤むるゆへ。さりながら勤め〳〵と思ひ、酒過し煩ふて下さるな。ヤお客の傍で嘸氣詰り。少の間成と寢轉んで休息なされ。親方と思ひ氣兼は無用。我等が大事の金箱達」と、ふはと乘せても暴馬の、轡に手綱許されじ。中にも長門は姉女郎、「のふ奥州さん半ぶ樣いづれも旦那さんのよい御機嫌。今の御訴訟申さふでは有まいか」と、突と出、長門「折がな〳〵此お願ひと、傍輩殘らず申合せ置しは、あの病人白妙殿の事。旦那さんも油斷なふ醫者衆も替へ、養生は樣々なれど、次第々々に病も重り、金の鎖で繫いでも、此度はあつち物と醫者樣達のお咄。其身は時節是非に叶はぬ事ながら、いたはしいは彼の西國の吉樣といふお客。新艘からのお名染は、我々も存ぜし事。とても死ぬる道ならば、一日成共廓の外で死せたいとの歎き。我人はかない勤の身、兩方の心思ひやられます。此事は井筒屋から、度々御耳へ入し事。今日は別して惣太夫中天神衆殘らずの御願ひ」と、半分云せず、長「アヽこまだるい、跡を聞迄もない。了簡して白妙に隙くれといふ事か、成らぬ事。白妙といふ奴で何程か損をする。三十日余り煩ふて、

舉―忘八にかく

あつち物―冥途のもの

新艘―禿などの傾城になり始めを云（色道大鑑）

局―局女郎にて勤銀廿目（異本洞房語園）

ぐる云々―一味になつての願

すねはたばつて―拗ねしやちばる

勤はせず藥は喰ふ、人手は取る。地躰此吉とやらいふ田舍客めが穢い奴。六百兩で暇くれい。暇に千兩の小判耳が缺てもならぬ。定て今日は此客めが見物に紛れて、逢に來る手管が有と推量し、あれあの鼻の先の數寄屋へ病人奴を打込で置。皆見廻に往く事無用。禿奴等局の奴等でも、白妙に水でも食はしたら棒縛り。新艘の横笛め、浪人の娘とやら吐して賴もし立すると聞。數寄屋の傍へも寄たらば、縛始にくゝし上てくれるといへ、客が大事往け〳〵」と、始の笑顏引換へ忽に閻魔顏面を被替ゆる如くなり。奥州ちつ共怖氣なく、「こりや旦那さん共覺へぬ。お客から千兩出る程なれば、私等が何の口叩きやしよ。あんまりそれは情ない。慘ふ御座んす旦那さん」長「何此長を情知らぬ慘いとな。扨は客に賴まれ、ぐるに成て訴訟か。六百兩に付るを千兩といふ身共より、慘いといふは客の事。知まいと思ふか　白妙めは其客の子を孕んでけつかる。見すゝ我子を持ごもつて死ぬるを見捨て、まあ四百兩惜む物知らず。是が慘ふ有まいか。爰を引張て千兩取か、但千兩損するか、爰らを氣強ふかゝらねば傾城屋はならぬ。一人に情かくれば跡々の例に成。情知らぬ親方と、すねはたばつて勤奄末にする奴等、棒の先で勤さしよ。いふな默れ」と睨付れば、「何程默れと有ても此長門は默らぬ。千兩の損德は

惣々すべて

榮耀するとは—此下に何吐すのを三字を入れて見るべし

練味噌—午蒡が味噌かぶつて泥塗のやうになるけん—鱠の劍にて擂消しめうが—茗荷と算加

白妙毀獨の上。私始數多の女郎、アヽ忝い賴もしい。慈悲な親方と思へば、心健しう一人の客も取外さず、内の爲になる樣にと身を忘れて勤める。本にいふじやなけれど、能の囃のと、榮耀榮華に誇て、朝晩王樣の上る樣な、二の膳三の膳、酢の甘いのは誰が云はす。ヤア旦那さん、惣々の女郎の心が反れたら、五千兩や七千兩の損が見たい迄。其頤が三間程横町へ飛やんしよ。ヤア旦那さん」とぞせりかけらる。長「何奴も〳〵憎い奴。女郎のお蔭で榮耀するとは。世界中の忘八屋に、せめて長が三分一、眞似る者が何處に有。持て出た身の果報ですする榮耀。頤が三間程ゆがむかゆがまぬか。これ見よ」と立上り、兩足にて蹴て〳〵、蹴散す本膳二の膳、刺身の鯉は糞物に踊り、練味噌かぶる牛蒡どろぼう鯛のあへ物、飯も汁もがんぞう鱠。けんに置たるめうがの程ぞ恐ろしき。有合ふ女郎「わつ」と計に逃んとす。長「こりや一人も動くな。遣手共男共縄持て來い、棒もて來い。頭取は長門奴」と、小柄摑んで引寄する。一子太四郎皷片手に素袍袴。「アヽ是々舞臺へ聞える」と走り出、「先御勘忍〳〵」ともぎ放し、きつと睨付け、「これ女郎共、なぜ御機嫌を損ふ。面々のお客を捨、白妙が爰へ出る事か。重てぐつ共いふたらば、此太四郎が堪忍せぬ。慮外ながら親父樣も親父樣。今日は歴々方の集り。家内に

ての我儘に、點打人は有まじと思ふは我身一分の理、世間の人が許さぬ。其證據御覽なされ。只今我等此鼓を調べしに、御存の折居の胴、拍て見ればほと〳〵と桶の底叩く樣なり。肝を潰し、皮を外せば何者の所爲にか、胴の中にお前の惡事、一家の惡口を料理の獻立、能の番付、二通に書て入置し。エヽ無念千萬此如く、後指を指るゝとは知らなんだ。一分が廢つた。讀むも涙が酬るれど、是お聞なされ。獻立一料理獻立。御汁世上の人を薄味噌、自慢臭い葱、面の皮牛蒡二ツに切鰡、明日御めし、煮物は傾城打擲の棒大口魚、燒物は取沙汰魴鮄、人間の葛醬油かけて奢るもの久しから漬の香の物、引て嫁菜、さるほう。恥蠣の吸物、抱への女郎伊丹諸白」エヽ口惜い。皆迄まだ〳〵讀れぬ。是又能の番付、「大きなせんざいさん〴〵そう。脇能身の程を白髮、八島の崩れ、諸道具のけばの梅、兩の手に金輪、世間で謠ふ親子籠太鼓、跡は天鼓微塵」聞つしやれたか親父樣。親子の耳へ入るからは國中は一ぱい。何んと恥を雪がふぞ。エヽ〳〵口惜い無念や」と、ずん〳〵に引裂、疊に打付〳〵て、どうと居り泣き居たり。長「アヽ氣の小さい、其心で長が跡は繼れまい。此榮耀の叶はぬ奴等が皆猜んでいふ事。何年か此かた人の噂に乘る男。それ程身代殖て來る。ひよつと人に譽ら

折居―胴の折居に鼓の繪あり
も汁云々―も主が人を輕蔑する
切鰡―斬りたい
飭濟―方々に廣まる
さるほう―嫁が去る
伊丹―痛み
大きな―鯰
白髮―知らず
八島―一家
金輪―捕はる人

上臈の面―松風の面
邂逅に―たまさかに、行平のわくらはにとふ人あちばの歌による
力なじみ―力なくにかけて彼の吉助やり手―むりやりに渚するにかく
視目嗅鼻―地獄の閻魔の前に居る千里人の善惡を見透すもの

れては跡の身持がむつかしい。いふ奴には云せて置け。構はぬ〳〵。あれ狂言が始つた。松風の用意せう。裝束共持て來い」と、怯む氣もなき氣の強さ。そも人間の皮一重、下は恐ろし上皮は、先美しき上臈の、面を持せて三重入にけり。表に囃す松風の、爰にも吹て白妙が、身に泌み渡る病の床。誰邂逅に訪ふ人の、數寄屋といへど隙間なきを明るさへ、力名染の「彼の人の、顏見る事の叶はずは、責て何うかと一言の死にたい」と、知らぬ來世の闇よりも、涙中有に迷ひけり。人に心を置皷。横笛が稚な名を、直に付たる竹の名の、身は川竹と成例。衣裳の模樣仕立口、著馴れぬ物を無理やり手が、歩き振にも非難いふ。人目を偸みわくせきと、急ぎにけらし白妙が立寄て。「ヤ、お眼開てかや」といひければ、重たき目元にじろりと見て、自「ナフ横笛どのかいの。よい女郎に成てじやの。奇特に見廻て下されし。視目嗅鼻より恐ろしき親方の目を忍び、能々心にかゝればこそ、年も往かいでしほらしい。嬉しふ御座んす忘れはせぬ。暇の事を傍輩衆が身に替ての訴訟、端々聞えて心ざしの嬉しさと、親方の辛さとはいか成世にか忘れうぞ。吉樣に逢ふ迄、ま少と生たい〳〵、と今朝迄も思ひしが、物いふ事も力なく、此胸の苦しさは、大方今夜が往生。是此方頼むぞや。此抱て居る紋付は、彼

の人様の形見の袷、棺に入て下さんせ。持ごもりて死ぬる身の眼を塞ぐと其儘、井筒屋迄知らせて、彼のお人の回向が受たいわいの」と、打伏て泣涙さへ弱行。藷「ヲヽ、そんな事氣遣ひせず、心慥に持しやんせ。私は常にも申通、嫁入する迄身を自墮落に持なと、母様の遺言立つまいかと、それは〳〵悲しうて、死ぬ様にも存ぜしに、長門様の才覺にて、此度の水揚とやらいふ事を、彼の吉様をお頼ゆへ、私に帶も解せず。お主は間を替へ、床の傍へも寄つかぬ様になされしゆへ、今日迄身を穢さず親の遺言違へぬ。此御恩送りには、假令内へ漏れ聞え、寸斷〳〵に刻まれても、ちよつと成共生世の中、逢せましたさ、能見物に紛らし顔隱してあれ迄」と、いへば覺えず起直り、自「ア、有難い忝い。早う逢たいとれ何處に。あれ〳〵あれに居さんす」と、這出るを、藷「これ申、何おしやんす。あれは庭の松の木、吉様ではないはいな」と、抱留むれば、自ア、扨は眼も早暗んだか。もう死ぬるに間は有まい。死際の顔を見せ、さぞ吉様が悲しかろ。私や又それが悲しい」と、又伏沈む計なり。横笛見る目も遣方なく、藷「早う逢ひたい見たいと、心のせくは道理ながら、あの入込の人々の目を忍び、橋がかりの椽の下より泉水の際を廻らねば、どうも爰へは參られず。物數いはず聲低に、お二人が顔計、見つ見らるゝを樂

寄つかぬ―よせつけぬ
生世の中―白妙の生きて此世にある間に

みに、聲立て下さんすな。人が聞付見付ては、吉樣は大事の御身。後の詮義が喧しし。必靜に〈」と、呼く中に笛皷。醫「あれ能が始まる、此紛れに首尾して連ましてや」と行振は、何時の間にやら里馴れて、しやんと搔取る飛石の、三つ地五つ地一セイの、音に紛らす忍路や。忍び男の忍び風、頭の上は橋がかり、歌ふ謠の松風に、身は村雨に袖ひぢて、涙に絞る頰冠り。皷も耳にびく〈と、秋風越ゆるは須磨の關、越すに越されぬ金の關。盗みせぬ身も盗人の、忍ぶに似たる篠竹の、枝折戸口に佇めば、白妙待兼ね、「ナフ吉樣かいの」と、起るにも腰立たず、立上れ共足立ず。男も垣に取付て、聲を忍べば招き合ひ、心を中に通はせて、年を隔ての天の川、涙を淵とせきかくる、稀の逢瀬ぞ哀なる。白妙やう〈、椽際迄這出て、身「ま一度逢ひたい〈と、思ふ念が屆いて、嬉しう往生しますれば、思ひ置事なけれ共、大事の子を身に宿し、浮世に殘し置もせず、未來へ連て往くわいの」と、又さめ〴〵と泣ければ、喜チ、それも先世の約束。手數多の身なれば、面々の果報により、大名貴人の北の方共成べき人。思へば此吉は和女の出世の妨。あれ彼の謠を聞きや、ウタイ「身にも及ぬ戀をさへ、須磨のあまりに罪深し」とは我事よ。此下に重ねしは二人寢し夜の其方の寢卷。形身に肌を放さぬぞや」身「ナフ

三地五地—飛石三ツ五ツにかけて小鼓打手の名なり一セイ—謠曲曲節の一種秋風越ゆる—行平の歌による

引手數多—多くの客より懸望さるゝ和女身にも云々—謠曲松風にある句以下同じ須磨—篇るにかく、次のあまりは海士にかく

我とても同じ事。過にし事を思ひ出せば懐しや。三歳は爰で名染をかけ、何事も皆夢と成、此形身の紋付計は残れ共、謡同音「是を見るたびに、彌増しの思ひ草、葉末に結ぶ露の間も、忘られこそあぢきなや。形見こそ今は仇なれ是なくば、忘るゝ隙も有なん」とあれ謡に歌ふもことはり。一日も夫婦とて世に住む甲斐の有にこそ。忘れ形身何にしようぞいの。謡同音「捨ても置れず取れば俤に立まさる。起臥わかでまくらより、跡より戀の責來れば、詮方涙に伏沈む事ぞ悲しき」折も折なる松風の、謡が泣す二人が中」横笛内へ立廻り、「いとしや側へ寄たいか。まだ五段の舞が有。此間にちよつと」と戸を明ゞれば、吉助前後の辨へなく、「是は」と計走入、抱付ば抱締て、直「語る事なひ云ふ事ない。極樂でも地獄でも附て往きたいばつかりぞ」皆「エ、忝なふ御座んす」と、互の肩に互の顔、打もたれ合ひ咽返り、泣忍び音に横笛も、連て袖をぞ絞りける。男やう〳〵涙を押へ、疊を叩いて、「エ、心に任せぬ、なれば成行身の果かな。とても死ぬるに極らば、一日でも一夜でも、身が手へ引取往生させ、今生の名殘に、入棺も葬禮も手にかけんと思ふ心一筋に、六百兩といひかけしに、無德心の長めに足本見られ、千兩なくては暇くれまいと、云募て埒明ず。吉助が子を懐妊すれば本妻同然。僅四百兩惜んで、廓の中で持

忘られこそ―一本忘ちれば こそ、謡曲松風にも忘られば こそとあれは誤なり

ごくに足らぬ―役に立たぬ

寶は身の云々―寶は有合はすれば身を救ふの意の諺「代かへて銘をつきぬる腰刀げにも寶は身のさし合せ」(吾吟我集)

ごもりに殺した穢ひ奴と、人でなしの長めに蔑まるゝ此無念。身を切裂ても晴やらず。ごくに足らぬ身の上咄、語つて益なき事ながら、我親迄は人に知られし名有武士。子細有て浪人し、我五才の時西國、今の親の養子と成、氏を換え名字を捨、算盤秤を取しより、産の親とは音信不通。住所も知らねば、況て生死の便も聞かず。今の親は商人の一錢をあだにせず。手代共の算用嚴しくて、金銀は我物ながら水の月、目に見る計手に取られず。され共指た一腰は實父の譲り、大國一ケ國三が國の價共成名劍。寶は身の指合、代なして和女が身の代と、方々主を尋るに、ナフ是非もなや。我冥加に盡たるか。千兩共萬兩共限り知れぬ此太刀を、やう〳〵三百兩五百兩、六百兩より上に直を付る者なければ、神を恨み佛を恨み、唐高麗へも渡られず。詮方更にあらばこそ。むざ〳〵と廓の中で身を果さす、腑甲斐なき男持たよな。今の恨は此太刀、我腹に突立ば、人の命は取べきが、白妙といふ女の身一つを助けぬ物。寶とは誰名付しぞ。竹の箆には劣し」と、柄を叩き鍔を打、かつぱと臥て泣ければ、白妙も手を合せ、「余り冥加恐し。數ならぬ此身ゆへ、重代の寶を放そとは、左程私が可愛ひか。因果な物に馴初て、苦勞させますおいとしや」と、二人が繰言悔言、盡せぬ泪ぞ道理成。傍に聞居る横笛、泪に沈む顔振上、

「あれはや能の切果ると其儘衣裳脱に。あれからは一目なり、咎められては何方らの爲にもならぬぞや」喜「チャ何時迄も同じ事。今が末期の暇乞」白「さらばで御座んす」喜「來世で逢ふ」白「さらばや」と、立て見居て見羽拔鳥。謠同喜「關路の鷄も聲々に、夢も跡なく夜も明て、村雨と聞しも今朝見れば、松風計や殘るらん〳〵」壁「そりや果た。南無三寶始の道は人立有、樂屋から猶ならず、ハア、何處から戻しましよ。それ〳〵其處へ親方が裝束で。隱るゝだけは先づ爰へ」と、白妙が夜著の裙に押隱し、横笛上に打もたれ、障子はた〳〵差籠たる。長は風折水干、後見お出入どや〳〵と、長「ハヽア出來た〳〵。殊に舞の内、「我も木陰にいざ立寄て」の思ひ入、息がはづむ」と入團扇、扇ぐやら擦るやら、蚤「先面脱せませ。汗を拭へ」と寄たかる。長烏帽子著ながら、長「何んと松風出來たか。此裝束で直に爰で自然居士をして見せうかの。脇の「人買が檜權を以て散々に打」。ウタイ「身には縄口には綿の轡をはめ、泣け共聲の出ばこそ」といふ處を面白ふして見せう。男共樫の木の棒持て來いやい」と呼はれば、常の氣知りて下人共、二言と呼れず走來る。長「只今揚幕入さまに、面の内からちらりと見た。病人奴が居る數寄屋へ何者か逃込で、障子を鎖すを見付た。あれ探して引摺出せ。早う〳〵。用捨せば共に片端喰はすぞ」男「はつちや怖

廂路の云々―謠曲松風の長後の句

自然居士―謠曲の名、或居士が少女を救はん爲人商人に呵責せちゝ筋なり

脇―人買はワキなり自然居士の少女を虐げる所を云

脾の臓云々―脾の臓強き者は必ず聲大なりびり―小めちろ

旦那殿―敬語に殿は機より輕ければいふ

し」と會釋もせず、障子を明れば横笛が、身を慄はして居る處を、「旦那の御意じや」とあらけなく、人のもてなす花盛り、落花微塵に引出す。脾の臓強き大音にて、長「こりやびり奴、此長が日來の手並知りながら、今から野太い根性さけ、後にはおのれ何に成。病人めに何用有て誰に頼まれた。サア吐さぬか」と振上て、二三十滅多打。起直ればはたと打、居直れば丁と打。髪も頭も分ちなく、簪笄打折れて、鼈甲飛んで亂れ髪。骨も散るかと哀なり。横笛聲も涙にくれ、「白妙様へ見廻ふたは誰にも頼まれませぬ。あんまり見る目もいとしさゆへ、今死ぬるお人にちよつと見廻に往たとて、科緩怠になるならば、殺し成と如何成と。餘りな旦那殿」と、云せも敢ず、長「うぬが口から殿呼り。それ眞裸にして庭の松へ括し上げい」男「はつ」と云ふより情なく、帶引ほどけば一家の女郎、「それ程の科もない人を、こりやあんまりな旦那さん。新艘は打さぬ」と、駈寄る處を棒横たへ、長「一ッ穴の狐共」と、十ッ方滅方打廻せば、打れて左右なく寄付かず。横笛骨も碎くる計、弱る心を取直し、横「ナフ傍輩さん達怪我して下さんすな。私が事は構はずと留て下さんせ。これ殿といふた腹立に恥かしい裸にして縛りやつたの。何程でも云止まぬ。旦那殿どの〳〵どの。エヽ情ない。死なしやつた母様ならで、友達にも見せ

雪の云々―雪といふより消えゝと續けたり

ぬ女子の肌を口惜い。此樣な姿は地獄の繪に見た計。鬼め童子め茨木童子め、白妙さんと此横笛が妄念が、其方の身に報はふ」と、涙まじりの雜言は、人の泣より哀なり。長「エヽ憎くい奴め。それ男共、臺所の大根一本持て來い」と、五ッ六ッ續け打。打れて雪の裸身も消へゝとこそ成にけれ。男「申旦那樣、此大根何になされます」長「何になさるゝとはそれ捻込め」男「此大きな物、何處もとへ捻込ましよ」長「頰桁叩く口へ捻込め」男「畏た」と、口押割んとする處へ、數寄屋の障子蹴破つて、吉助堪らず飛んで出、大根取て下僕が頰はたと打、横笛が縛め捻ちぎれば、半死半生。吉「これ傍輩達、勝手へ連て看病あれ」と、取て押退け、長が前にどうど座し、吉「こりや長、白妙と二世の契約せし西國の吉助といふ男。白妙が病氣見廻ふが科ならば、横笛よりも先此男、打殺して腹を愈よ。サア打て打ぬか。長恐しいか、何所打ぬ」とせめかくれば、長「ヲヽおのれとても商ひ物に忍び逢ふからは盗人よ。此長が打兼ふか。サア腰の刃物を渡せ」吉「ムヽ此刃物が怖さに得討ぬか。ヤイ此刀は少由緒有て、うぬら如き根性の穢れた、犬同然の奴に拔く刀じやない。氣遣ひせず共寄て打て。但怖いか」長「何んの怖い」と打てかゝる棒の先、しかと取て拂ひのけ、突と入て擔ぎ上げ、大の法師を筋斗返り、ぎやつとのめらせ、馬乘にどう

と跨り、握拳に息吹かけ、七ッ八ッ十二三、頭も碎けと撲廻す。一子太四郎飛で出「そりや親父樣投た。打殺せ大事ない」男「まつかせ」と立かゝり、家内が寄て棒ずくめ、やう〳〵長を引除くる。吉助は只一人、取付ば捥放し、頰がまちゐんがまち、腕骨うで木障子の腰骨、片膝足の蹈どなく、誰が打つやらくらはすやら、棒に別ちは無かりけり。足は立ず目はくるめく、衣類も裂れ髪亂れ、心計の亂れねば、吉「おのれいッかに傾城屋の法なればとて、すり强盜を打如く、能つく恥を與へしな。我親の世なりせば、一々獄門にかくる奴なれど、町人の淺ましさ、女郎屋へ忍び込んだる過りなれば、エヽ此儘叩殺さるゝよ。ヤレ白妙、死手三途を連立たん」と、廊下傳ひの欄干を、力に取付たぢ〳〵。這上つてはよろ〳〵、よろほひ〳〵歩み付、數寄屋に入て、「ヤア白妙ははや息絶しか。先立しか」といふ聲に、家内はつと驚く折から、遣手の龜が慌だしく、「ナフ新艘の横笛樣が剃刀で自害して、まだ死切らねど深疵。斯う申内もあぶなし」と、色を違へて云ひければ、さしも野太きひらぎの長、惻としてこそ見えにけり。

頰がまち云々—吉助の頰骨やら緣框やら腕骨やら障子の骨やら滅多打れする

死手—死出

御意得る—申上し通り

第五

斯る處に北白河の廣文、親子夫婦在所の者、加藤兵衞伴ひつか〳〵と入て、廣「なふ〳〵長殿、先程より公用に就て御意得る如く、度々申入るれ共取合れず。當春我

等が賣し横笛取戻して、本親へ急度渡すべしとの上意に候へ共、其時の五十貫、今更一錢なければ、取戻さん力なきゆへ、此琴柱と申我等が娘を代りに取、此横笛を親父加藤兵衞殿へ渡して給べ。其爲所の庄屋組中、同道いたす」と陳ければ、長不興顏にて、「ムヽ此方が横笛が父御か。此方商賣の作法で、元銀に十倍增ても、取戻すの、代りのといふ事いたさね共、其處は身が了簡してやらふが、其方の娘は只た今自害して十死一生。それとても代たくば、此方は代德。相手同士の詰開き〳〵」加藤「はつ」と計に氣も狂亂。「いやさ命有ての詰開き。死なぬ内先逢されよ」と急きければ、遣手共口々に、「其身も父御の御出と聞逢たひ望み。只今是へ」と、手負を閨の床ながら、そろ〳〵舁て出る躰。父は目もくれ走寄「ヤレ横笛父成は」と、朱の血潮に抱きつき、手足を廣げ身を撫て、疵もとつくと見屆け、加「自害の疵より棒の痕、死したる母が美しう、產付たる肌ゑを空處もなく打れしは、自害せず共死ぬべきに、是を無念の自害かや。いつそ擲き殺されば、敵を取て腹いん物。可愛や早まつて思ひをかけてくれるか」と、人目も恥ず聲を上、伏沈みてぞ泣居たる。横笛父の手を取て、「ナフ打擲かるゝは常の事。今死ぬる病人さへ慘い辛い親方なれば、我一人無念なと思ふではなけれ共、流れを立てゝ母樣の、遺言反く悲

詰開―談判

思をかける―心配かける

しさに、あらぬ歎をかけます」と、父を見上げ見下して、泣聲も早息切して、最期近くぞ見えにける。廣文が娘傍に寄て涙を押へ、「おいとしや。皆我父の所業故。此春よりの憂さ辛さ、御身の上を思ひ遣り、自が代りに殘り、御身樣を戻さんと、是迄は參りしに敢ない死を遊ばす。なふ父上、たとへ此身が代らぬ迚、彼の御方の最期を見て、すご〳〵とは返られまじ。家を出るより覺悟ぞや。我をかばひ給ふな」と、さも潔き詞の末。父「ヲヽ出來いた〳〵」と、取て引寄せ刺通さんとする處を、母「暫く」と押留め、「人の子殺して、我子を助けふではなけれ共、世には療治も有事。此子殺して若し彼の子の疵本復有ならば、此方の娘は誰が產んで返そふぞ。なふ横笛樣、助かるも死ぬるも獨と思へど二人の命。氣を慥に持てたべ。看病してたべ人々」と悶へ焦れ泣けれ共、女郎遣手も哀さに、「何處ぞでは此家に、大きな事が出來う〳〵と思ふた」と、袖を絞らぬ者はなし。今を最期の横笛、「なふ父上、必彼の子を助けて給べ。是のみ黃泉の障りぞや。私や來世で母樣に、久しうて逢ふが嬉しい。南無阿彌陀」の一聲も、睡れる如く息絕へたり。加藤は死骸に抱付、前後不覺に取亂す。廣文娘を引寄せ、既に斯うよと見へける處、加藤周章て抱取、「いかな〳〵思ひも寄らず。不便の娘が只今の遺言、父母の遺言よ

り默止されず。此子を某申受、名を横笛と呼からは、我子が二度蘇生つたる同然。我子に指もさゝせぬ」と、猶抱しめて放さねば、夫婦あつと悅び涙。廣文何とか思ひけん、胸押寬げ拔たる刀、腹にぐつと突立、脊骨をかけて引廻す。人々「これは狂氣か」と、驚き騷げば、廣「ア、騷ぐまい〳〵」と押鎭め、「ナフ加藤殿、我等も昔は弓矢打物取て、誰に劣らぬ身成しが、主君の諫言耳に逆ひ、勘氣を受て此態。若かりし時忍び妻の腹に男子一人設けしを、商人の養子となし、其後此娘一人は持たれ共、年寄に隨ひ、世に力なく便なく、兄めを他人にくれずば弓馬の家を起し、老の樂み、浪人の憂目は見まじい物。惜や口惜や子程の寶は無き物と、我身の上は見ゆれ共、人の上には瞽同然。洛中變化蔓つて、夜な〳〵人を失ふ由。これ幸の紛しものと、思ひ初たる一念が、地獄の道の門出なり。なふ加藤殿、其子が素性も穢からず。平家の大將常陸介安盛が執權、八郎權の頭秀國とは我事よ」と、いふ聲に吉助、覺えず廊下を飛で出、言「なふ父上か。我こそ商人の養子となりし、本名は右馬之允」と絕付ゞば、廣「寄まい〳〵子ではない。右馬之允といふ子は持ぬ」と、睨付られて聲を上、「子でないとは情なや。御無沙汰の不孝は御免あれ。何僞りを申べき。紅葉狩の此太刀を證據にて、親よと子よと只一言、お詞を賴奉る」と、ど

人の上云々―人の身の上を推量する目はなしと也

堅凍―玄冬にて冬の異名
九夏―夏九十日
三伏―夏至の後第三の庚を初伏第四の庚を中伏立秋後の初庚を末伏と云

うど臥て泣ければ、厲「ヲヽ、太刀に儁なければとて、親子とは何事ぞ、五つより其年迄人と成しは誰が養育。堅凍素雪の寒き夜、九夏三伏の暑き日に、老たる親を養ふより、子には心の碎る〻。其憂苦勞を人にかけ、まんまと育て上させ、誠の親よ實子よと親み寄、養ひ親の心に滿足せうか。何〻と嬉しかるべきか。飛しされ子ではない。なふ加藤殿、とてもの事に此母も、其子が乳母となしてたべ。是兩人、加藤殿へ忠孝勵み、我を親と思ふなる。一遍の念佛も親と思はど受まじきぞ。他人と思ひ回向せよ。一日の精進も養親への無禮なり。涙一ッ滴翻しなば、七生迄の恨みなり。お暇申加藤殿。横笛殿さらばや」と、刀を抜けば紅の、紅葉における秋の霜、消てはかなく成にけり。女房娘右馬之允、遺言重んじ泣ぬ顏。加藤兵衞所の者「前代未聞の義士貞女、死骸共は跡より。母横笛は先へ歸れ」といひければ、長大聲上「何處へ〳〵。横笛が代りにて、名も横笛と呼からは、其儘此方の抱への内。手形の通勤さす。暇が欲くば五十貫に廿割增し千貫積め。男共、横笛を留め、親兄弟棒ずくめにして、追出せ敲き出せ」といふ處に、俄に表騷がしく、見世も格子も打破る計、坂田の公時眞先に、定光末武綱保昌、山伏出立に込入て、「上意〳〵」と金剛杖、ぶち伏せ〳〵、「誰か有。親子共にあれ括れ」「承る」と加藤兵衞、吉助、踏付〳〵

酒天童子—酒呑童子

せぶつて—いざめて

縛付て引据ゆる。渡部の綱進み出、「やい長承れ。己が奉公人の抱へ樣、人買同然の仕方。其上折檻厳しく拷問をまなび、殊には歴々の町人さへ慎む程成奢、身の程知らず世を憚らぬ我儘。其外數箇條の罪科は、疾く召捕らるべき處、酒天童子退治に、弓箭の御用繁多の間宥免せられしなり。童子やす〳〵退治有、御歸洛の道より直に、我々仰を蒙つたり」と云渡す。公時躍出、「女郎せぶつて摑取た一歩小判の金が罰、覺へたか」と、こんと喰はす頭の鉢、四邊も響く計なり。長頭を下げ、「一々誤奉る。世上の人も聞給へ。驕る者久しからず。我人に辛ければ人又我に辛し、と口にはいへど心に知らず。斯う災難の來る時、始て悔むも甲斐もなし。重罪は我一人、彼の世悴助け下され」と、涙に沈むぞ心地よき。鎌「兎角は都の御沙汰ぞ」と、警固厳しく引立る。酒天童子、茨木童子、退治有も世の誡め。政道渾く賴光は、朝參院參御振廻、京近國の悦びたる、賑ひたるに酒樽に、だい〳〵の御代こそ目出たけれ。